

報特攻

平成9年5月

第31号

〒105 東京都港区虎ノ門
3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

第十六回特攻隊合同慰霊祭

4月2日我が協会主催の合同慰霊祭が靖國神社で行はれた。快晴に恵まれ境内の桜は満開で、平日なのに一般の参拝者は参道に充ちていた。

瀬島会長は祭文という、皆様方は驚ての大戦の最も熾烈にして危急存亡のときに、若き春秋に富む身を肉親同胞への恩愛を断ち切って祖國、同胞、郷土の為にと空に、地に、海へと突入散華されました。その尽忠無比烈々たる闘志は、戦後も途絶えることなく残った同胞に継承せられ、祖國再建の基礎となり遂に今日の平和日本の礎を築くに至りました。今日の繁栄の基礎は実に皆様方の突入に際しての不惜身命のみに心にあると信じます。(中略)

正確なる歴史の事実を伝え祖國の発展に寄与することこそ、御霊を安んじ

奉る道と確信して微力を傾注しているところでありませう。幸にも昨今若い人々の中に、皆様方が散華された当時の至誠至純の心を学ぼうとする一筋の流れが湧いて参りましたことは、心強い限りと考えます。この若い人々と共に今後益々英霊顕彰に努める覚悟であります。

祭文奏上に続いて石橋一歌氏により特攻戦没者作の献詠があった。

かずならぬ身にはあれども國のため
捧げまつらむ空のまもり
第一神雷桜花隊 緒方 翼
いざさらば我はみくにの山桜
母の身もとにかへり咲かなむ

神事終了後私学会館に移り、総会及び懇親会を行った。



参列者400人 拝殿一杯となる

懇親会の前に映画「天翔る青春」を観覧した。この映画の内容については25ページに紹介してあるが、本日の行事にふさわしい感銘深いものであった。ところで毎度のことであるが、我が協会の画伯達は特攻に因む絵画約六〇

目次

特攻隊合同慰霊祭	1
マリアナB29に対する攻撃⑤	2
B29に対する体当たり③	10
薫空挺隊と地上義勇隊	14
知覧特攻会館に仏像奉納	17
日頃思っていること	18
愛媛玉くし料訴訟最高裁判決	21
特攻の心	22
基地の花「特攻花」	24
建国記念の日奉祝式典	25
回天追悼式	26
8年度事業報告と会計報告	27

点を境内に展示した。出品者は伊藤直之、市川国雄、海法秀一、松木武仁の四氏であり、慰霊祭参列者だけでなく一般の参拝者の注目を引き、熱心に見入る人が多かった。

我々は慰霊祭と称し祭典を行うが、それが戦没者の追悼だけに終ってしまつては意味がない。特攻戦没者の精神を後世に伝えることが最大の慰霊である。今回のような絵画展もその一助にならう。文章を読むことの疎くなった現代人に対し、絵は確かに有力な媒体である。系統的に構成した一群の画材に簡潔な解説を付けたものを作り、英霊顕彰大絵画展を志したい。

聯隊長はサイパン攻撃部隊の差出しを命ぜられたことを、冒頭に述べた。そして、そのような作戦が現下の戦局上必要なことであるというような意味のことを述べ始めたとき、奥山を総べてを察したのか、聯隊長の発言を遮るように、その指揮官を私がやりましようと言いつつ切った。

そこで聯隊長はホッとしたような表情で、第四中隊をそのまま作戦部隊にするのか、それとも聯隊全部から志願者を募るかについて、奥山に意見を求めた。百二十数名という人数も示されていたらしい。



奥山大尉 沖縄出撃時

将校以下の家庭の事情など、思いめぐらしていたのであるが、意を決したように、私の中隊で編成しますと言った。しかし、協議の結果、次のように結着した。

奥山隊が出た後も第四中隊を存続させることになっていたので、先ず他の中隊から40名許りの下士官兵を第四中隊に転属させ、それらも合せて一二六名の特別部隊を編成し、副中隊長浪花大尉(54期)以下を残して第4中隊とするというようなことが、そのとき話合われたという。

そのあと奥山は中隊に戻り、将校を集めてそれらのことを伝えた。落下傘部隊の中隊の編制では、副中隊長という職があり、1名の小隊長を加え中隊付将校は5名い

た。このとき第4中隊は一名定員オーバーだった。従って浪花大尉を残してあとの五名は編成に入れることになった。中隊長が行くならばと、誰も当然のことのように受留めた。

下士官兵に対しては、防諜上の配慮か

らサイパン攻撃のことは当分伏せて、特別演習参加というように指導された。これに対し奥山は不満であって、今回の出動では再び生きて唐瀬原の土を踏むことはできない、と強調しつつ人選を進めた。第2挺進団は比島方面に向ったものの、その後の消息は不明で、神風特攻隊の話を書くにつけ、戦局の容易でないことを知っていた。誰も期するところがあがり、動揺は全く見られなかった。

奥山隊一二六名という人数は、どこで決ったのか明らかでない。これに豊岡に行つてから、中野学校出身の将校8名、下士官2名が加わつて一三六名となり、翌年5月沖縄に出撃するまで一名も欠けることなく、全員が健軍飛行場を発っている。

奥山隊は指揮班と五個小隊より成り、小隊は二個分隊、分隊は三人の組3個という編成をとった。渡部利夫大尉(55期)は、小隊長ではあるが副隊長格となつていた。

編成が完結したとき、奥山は小隊ごとに巻紙に血で氏名を書かせた。その一通は習志野にある自衛隊空挺団の資料館に飾られている。衛生兵が注射器で採血し、それを皿に受け筆に含ませた。書いた。

「赤穂義士の血判状だ」渡部はこの

ようなことが好きだったので、豪快に笑いながら太筆にたっぷり血を含ませて書いたが、奥山は細筆を短く持ち、指揮班の冒頭に署名した。彼は何事も形式を排し、外観を取り繕うようなこととはしない男だった。それが自らの意かどうか知らないが、血判状を書かせた。そのことが部下をして今回の出動が只事でないことを知らしめた。彼は、後に不時着して生き残ったある下士官の述懐である。

それが済んでから、妻帯者は身辺整理のため家庭に帰し、独身者も郷里の近い者は一泊で帰省させた。しかし、これは今までも動員が下令されて戦場に向つたときと同様であった。

潜入諜報員

奥山隊は12月5日夜唐瀬原の兵営を発つて豊岡に向うのであるが、それは別に、この部隊に入るべき10名の将校以下が別のところで人選されていた。以下述べることは、この10人のうち唯一人の生き残り熊倉順策少尉(新潟県在住)の述懐をまとめたものである。

19年11月の末、陸軍中野学校二俣分校では開校以来初の卒業式が行われた。ここでは、諜報活動やゲリラ戦に必

要なことを教育したが、技術的なこともさることながら、最も重視したのは精神の陶冶だった。

一人になっても、誰も見ていなくても、最後まで戦い、名を残さず、死んでゆける国士を養成するのがこの学校の狙いだった。このとき二俣分校卒業生の中に、戦後三十年間ルパン島で頑張り通した小野田少尉のいたことを思えば、どのような教育だったか想像できる。

卒業の数日前、サイパン行きを志願する者はないか、と言われたとき、阿部、梶原、棟方、渡部、原田、熊倉の六人の見習士官は真先に手を挙げた。卒業生はそれぞれ各軍司令部付として発令されたが、この六人は大本営陸軍部付という命課だった。

「名もなく死んでくれ」赴任先ごとに分れて申告したとき、分校長熊川中佐はこの六人にそう言った。さて、六人は早速上京して市ヶ谷台

上参謀本部の門をくぐった。そこには中野学校の本日から同時に発令されこの一行に加った辻岡、石山の両少尉が待っていて、総勢8名となった。二人は分校出の者より一年先輩である。

通常見習士官が着任しても参謀総長には申告しない。ところが、今回は違う。梅津参謀総長は、参謀次長森中

将、第二部長有末少将はか担当の参謀を引き具し、一同の前に進み出て、「オオ、お前たちが行ってくれるのか、そうか、そうか」と慈父のような眼差しで一同を見た。

申告が済んだ後、一同は昼食を共にした。この席上でも参謀総長は、一人一人に家庭の状況を尋ね、優しく語りながら聞き、「九州から部隊が来るまで郷里に帰ってきなさい」先祖の墓前にと菊花一輪ずつを与え、傍の参謀を顧みて、「見習士官は特例をもって早く任官できるように、陸軍省に交渉せよ」と命じた。

鶴の一声、翌日六人の見習士官は少尉に任官した。八人が奥山隊に合流したとき、中野学校出身の通信専門の下士官、酒井、菅野両軍曹が加って、中野学校出は計一〇名となった。

この人々はサイパンに潜入して諜報勤務に任ずることになっていたが、結局は翌年の沖繩突入に加り、一名の時着生還を除き、他の九人は帰って来なかった。

豊岡に集結

12月5日夜、奥山隊二六名は密かな見送りを受けて、日豊線川南駅を発った。7日に東海地方に大地震が発

生し、浜名湖附近で鉄道が不通となったので、中央線に迂回して8日になって豊岡に到着した。途中下士官兵には行先の公表を禁じられていたので、佐世保か呉に行き、挺進第3聯隊のように空母に乗って南方に行くのかと取沙汰されていた。

豊岡に来て、奥山隊全員に簡明直截にその任務を告げたのは、松林の中に作られていたB-29の実大模型であった。

サイパンを基地とするB-29が、初めて帝都上空に現れたのは11月1日である。このときは一機が偵察に飛来した。初空襲は11月24日であり、その後は29日、30日、12月3日となっているが、奥山隊の将兵にとっては、身をもって体験していないので、それほど深刻に感じていなかった。それより前、北九州が盛んに空襲を受け、宮崎県下も灯火管制を強いられたが、唐瀬原あたりは、まだまだ平穩無事だった。それが、教導航空軍の参謀より目下の戦況とサイパン特攻の作戦構想を示され、事態の只事でないことを知らされた。

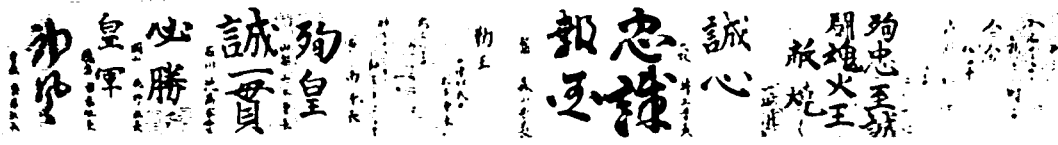
「第3独立飛行隊の九七重12機に搭乗し、サイパン島のアスリート飛行場に強行着陸し、このB-29を爆破する」という本作戦の構想を説明した

参謀は、「目的を達した後は森林に隠れて遊撃戦を行う」とつけ加えたが、玉碎は間違いないし、要は命のある間にどれだけの戦果を挙げ得るか、ということにある。それから火の出るような訓練が始った。

B-29に対する攻撃訓練が開始されて間もなく、中野学校出身の一〇名が到着した。潜入諜報員とはいふものの、それはサイパンに到着してからのこと、先ずは奥山隊の一員として同じような訓練に入った。

奥山大尉以下全員が教導航空軍司令部付として発令されていたが、山田聯隊長は暫く付添ってお

り、軍司令部や航空士官学校との連絡に任じた。



小隊ごとの番書きの一部

第三独立飛行隊

この部隊はサイパン爆撃のため、19年8月に銚田陸軍飛行学校で編成された特別任務部隊である。機種は百式司令機を爆撃機に改装したものである。11月6日に一部をもってサイパン爆撃を実施したが、もともと偵察機だったため、乗員及び爆弾搭載量が少なく、第二独立飛行隊ほどの成果を挙げ得なかった。第二独立飛行隊とは、新海希典少佐（50期）の率いる同任務の部隊である。

その後奥山隊を載せてサイパンに強行着陸することになり、11月下旬浜松に移り、機種を九七重に改編し、一部人員を入替え訓練を開始した。隊長には諏訪部忠一大尉（51期）が、11月27日に発令された。そのほかの操縦者等については、将校だけは現存する異動通報で次の通りわかっているが、下士官についてはいつ補充されたのか判明しない。

12月4日付、浜松教導飛行師団より、新妻幸雄（57）、荒谷猛（57）、同教導飛行隊より酒井敏夫（特操）、久野正信（少22）、青井輝行（幹候）、瀬立武夫（幹候）。第二独立飛行隊より、町田一郎（56）、川守出啓志（57）。宇都宮教導飛行師団教導飛行

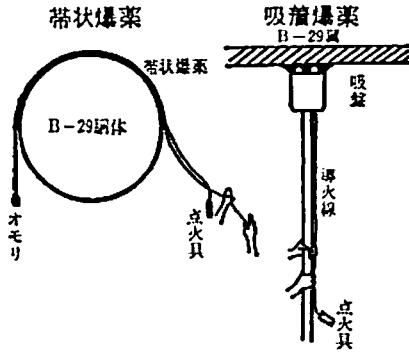
隊より、小林真吾（57）、宇都宮教導飛行師団司令部より酒井義男（57）など同日付で一二名の将校が転出してゐる。

この部隊は後に沖縄に突入し、そのときは不時着による下士官の生存者はあったが、その後第60戦隊に所属して戦死してしまったので、奥山隊ほど詳しいことが判らないのは残念である。

必殺の戦法

奥山隊は豊岡に到着して間もなく、「神兵皇隊（すめら隊）」と命名された。これは誰の発案かわからないが、付添っていた山田聯隊長が命名式をやったという。

「義烈空挺隊」という名称は、年が明けて浜松に移り、サイパン出撃の前に



教導航空軍でつけた呼称である。

さて、奥山隊は豊岡に到着すると、既にB-29の実大模型が松林の中に出ていた。それは丸太で骨組を作り、胴体や主翼の要部にトタン板を張ったもので、地上からの高さは実物通りになっていた。

訓練というのは、敵飛行場に着陸したならば誘導路を疾走し、B-29に飛びかかりこれを爆破する動作だった。爆破には次の二つの方法を用いた。

その一つはB-29の胴体の上縁は地上から4米50位ある。これに投縄の要領で、帯状爆薬を投上げるのであるが、初めはなかなか届かない。上背のある者にはできるが、背の低い者にはむずかしいことだった。それが何回もやるうちに要領を覚えていった。何しろ体力と運動神経については抜群の者ばかりだったから。

もう一つの方法は、長さ1米50程の棒の先に、4キロの爆薬がついているものを翼のつけ根に装着して爆破することだった。爆薬の上には、ゴムの吸盤が取付けてあって、これで翼の下面に吸着する仕掛だった。

この方法は帯状爆薬を投上げるよりも容易だったが、相手がトタンの一枚板とは異り、もしリベットの頭やジュラルミンの継目でもあれば、密着が悪

く確実に吸着するかどうか不安が残った。どの方法も装着後導火索に点火して退避することになっていた。吸着爆薬については、棒を保持したまま爆破した方がよいという意見も出たが、奥山は一人で五機を屠れ、といって自爆案はとらなかった。

ここにきてから間もなく、関東地区にB-29の来襲があった。その頃はまだ都市に対する無差別爆撃は始つておらず、主として軍需工場が狙われた。豊岡の宮庭で見ていると、晴れ渡った師走の空に白い飛行雲を曳きながら、西から東へ悠々と飛んでゆく。高度1万米もあろうか。飛行雲がなければ、ちょっと発見できない。勿論爆音は聞えない。三機編隊で数群続いている。

そのうちに、西南の方向で遠雷の轟くような爆発音を聞く。

「やりあがったな」誰かが叫ぶ。奥山隊の者にとつては、初めての土地でよく判らないが、飛行場勤務兵の話によると、三鷹の中島飛行機工場が爆撃を受けているという。

腹の底から怒りがこみ上げてくる。あいつらの寝込みを襲ってやろう。

その日が一日遅ければ、一日だけ我方の貴重な戦力が失われてゆく。

その日の訓練は特に気合がかかった。

誘導路上を50米ほど一目散に駆け抜ける。その間射撃を受けても、一挙に目標のところまで走り込む。B-29の下まで飛込んだならば、すかさず例の爆薬を装着する。

点火管の紐を引き、点火を確認する。30米許り後退して伏せる。

ただこれだけの行動を、それこそ火が出るほどに激しく訓練した。一見簡単なような動作でも、その中に奥儀というものがあることを知る。投げ上げる模擬带状爆薬の先に着いている砂塵が、やがて身体の一部のようになっていった。入神の域とは、このことを言うのであろう。

奥山は「攻撃訓」と題し、次のように語った。

- 一つ 一斉攻撃機刺と
 - 二つ 任務は絶対 俺がやる
 - 三つ 三人三世ぞ 戦友ぞ
 - 四つ よく見よ敵を 準備を早く
 - 五つ 剛胆沈着腹を据え
 - 六つ むだ弾打つな大事な弾ぞ
 - 七つ 七生報国早まるな
 - 八つ 早くしゃかり装着点火
 - 九つ ここが墓場ぞ しお時ぞ
 - 十で 尊き任務ぞ あくまで頑張れ
- 奥山は要求した。一人で五機を破壊せよ。その後敵の宿舎に突入し、息の

根の続く限り敵兵を殺傷せよ。但し、このときは飛行隊と諜報員は別行動とする。

飛行隊の練度

奥山隊が豊岡に来て一週間ばかり経って、第3独立飛行隊が浜松から到着したというから、12月10日頃である。初対面である。奥山隊は教導航空軍司令部から、サイパン行きは年内に聞かされていた。クリスマスの前夜にということも、聞いた覚えがあると証言する者もいる。

将校室でお互の幹部の紹介があった後、奥山は諜訪部に向って尋ねた。「どうかね、サイパンに行けるかね」「全機は無理です」諜訪部は冷静に答えた。

一瞬、部屋の空気が止った。「それならば、何機位行けますか、サイパンに到着できる確率は」渡部の問に対し、「そんなこと、やってみなければ解らんだろう。ナー諜訪部君」奥山はすかさず明るい口調で言ったという。

奥山隊はこの頃夜間訓練に入っていた。諜訪部隊も夜間訓練を始めていたが、その練度は十分ではなく、豊岡飛行場を見失い、他の飛行場に着陸する

ものもあつた。それに敵地に強行着陸して玉碎するということに、空中勤務者として釈然としないものがあり、奥山隊ほどには士気が昂らなかつた。しかし、豊岡に来てから「飛行隊は敵B-29を奪取しこれを操縦して帰還すべし」という任務が付加され、撃墜したB-29から入手した取扱書も渡され、その可能性は極めて少いにしても、士気は高揚してきた。

12月17日、大本営ではサイパン攻撃に奥山、諜訪部両隊を使用する最終決定を下し、月明の関係もあり、クリスマス頃と一応決定した。義烈空挺隊という名称が、このとき与えられたという者もいる。

教導航空軍ではサイパンのアスリート飛行場の航空写真を基礎に、地形模型を作った。両隊の合同研究の結果、風向の如何に拘らず西側から進入して強行着陸し、後続機に滑走路を開放するため、なるべく誘導路に突込んで停止するということで停止位置まで計画した。

誘導路の南側に兵舎があるが、これは放置して先ずB-29を爆破し、まだ命があればこれに斬り込むという考えだった。航空軍の参謀が来て、死に急ぐな、ゲリラ戦をやれ、と言ったが、奥山は、

「後のことは貴様らに任ず」と中野学校組に言って、取り合わなかつた。

12月22日、奥山隊と諜訪部隊の協同訓練が行われ、教導航空軍の菅原軍司令官、防衛総司令部の小林総参謀長らが視察した。

日没後豊岡飛行場を離陸し、関東一円を定められたコースで飛行して、所定の時刻にもとの飛行場に着陸する。着陸したならば直に機外に跳出し、航空士官学校の練習機の繫留してある地域に突進する。概略このような演習だった。

この演習での奥山隊の将兵は、僅かな月明りはあるものの暗闇の中を、昼間と少しも変らぬ速度で風の如く疾走し、軍司令官以下を驚嘆させた。しかし、飛行隊の方は航法未熟のため、約2時間の飛行で機位を見失い、なかなか豊岡に帰りつけないものがあつた。

この演習の飛行経路がどんなものだったかは、当事者が誰も残っていないのでわからないが、奥山隊の生存者の記憶によれば、ある一機の如きは、帝都上空を旋回しているうちに、どうして自分の位置が掴めなくなつてしまった。街は灯火管制で暗く、僅かに鉄道の駅だけがその輪郭が認められた。前方銃手の席に乗っていた奥山隊のある下士官が、風防ガラス越しに見

料理を喫した。豊岡に来てから毎日特別食で、一般の軍隊よりも上等のものを支給されていたが、正月料理は目を見張るような豪華なものだった。特別の食堂の食卓上に、所狭しと並んだ御馳走は、自分達の運命を物語るものでもあった。

挫折

少し遡るが19年12月26日教導航空軍は廃止され、第6航空軍が新設された。奥山隊も第3独立飛行隊も第6航空軍の所屬となったが、義烈空挺隊と



奥山大尉「挺進殉国」と書いている

いうのは軍令に拠る編制部隊ではないので、奥山隊の方は今迄同様軍司令部に籍があった。第6航空軍司令部は菅原道大中將で、この頃軍司令部は三宅坂にあった。

サイパン攻撃を秘匿して「とび」攻撃と呼んでいたが、第6航空軍では義烈空挺隊の「とび」攻撃を早く実施しないと、硫黄島中継が困難になることを心配した。問題は飛行隊の練度である。

菅原軍司令官は浜松に向いて、1月10日第3独立飛行隊の訓練を視察し

た。軍司令官も同乗して夜間飛行を実施させ、自らその練度を検した。そして、12月22日に見たときよりも、確かに練度が向上していることは認めた。新進気鋭の操縦者を加え、士気は高かったが、技倆はなお十分ではなかった。

軍司令官は飛行隊を豊岡に招致し、12日夜再度奥山隊との協同訓練を実施させ、練達の参謀を従え具に点検した結果、前回に比較して格段の進歩を認めるものの、飛行隊についてはなおも不安が残った。奥山隊については、航空軍の参謀が一言の口を挟む余地もなかった。

翌13日、義烈空挺隊は発進基地浜松に前進した。その頃の状況を、奥山隊の生残りのある曹長の日記を借りてみよう。

一月十二日

本日検閲ノタメ航空軍司令官菅原中將閣下始メ各参謀来隊視察サル
愈々決行モ間近 明日ハ前進基地ニ向ウコトナリ夕食時間開始メ学校長閣下関係者全員盛大ニ会食ヲ実施サレ且ツ諸官ノ訓示アリ感激ス

一月十三日

八時三十分学校長徳川中將閣下始メ生徒多数ノ見送ヲ受ケ修武台ヲ離陸前進基地浜松ニ向ウ

十時過キ浜松陸軍飛行学校着陸 想エバ落下傘部隊創設以来初メテ当校ニ到ル 懐シイ浜松時代ヲ思イ浮ブ 決行モ間近ナリト言ウ

浜松は奥山をはじめ多くの将兵にとって、懐しい土地であった。奥山は落下傘部隊創設時の研究員で、その後教官となり第一次練習員の教育を浜松で行った。奥山隊の古い下士官の大半は第一次練習員で占められていた。

数日遡るが、菅原軍司令官は1月9日、第2独立飛行隊長新海少佐を司令部に招致し、義烈空挺隊の「とび」攻撃について意見を聴取した。既に三回も「とび」攻撃を行った新海少佐は、このことについて権威者だった。

このとき策定された計画は次の通りである。

- 一、〇八〇〇〇〇八三〇浜松発、「つばめ」(硫黄島のこと) 着三三〇〇「つばめ」から「とび」まで所要時間四時間、決行は一九〇〇頃日没後二時間
- 二、飛行機一〇機、予備機二機、誘導機二機、計一四機
- 三、硫黄島に先発、奥山隊三〇名三機分、第三独立飛行隊二機分、計五機分

第6航空軍では、中継基地硫黄島が使えなくなるのを恐れていたが、この頃既に硫黄島使用が困難になっていた。本土から一〇〇〇キロ離れたこの島を、敵の空襲から守ることは不可能だった。爆撃を受ける度に、硫黄島の飛行場は復旧に二、三日を要する。爆撃ばかりではない、12月27日と1月5日には、艦砲射撃も受けている。

1月10日頃から硫黄島は連日敵機の攻撃を受けていた。それでも機を見て決行しようと、17日には軍装検査を実施し、いつでも出撃できる態勢を整えた。

奥山隊の将兵は、遺書、遺髪そのほか私物品一切を箱に詰め、聯隊から付添って来た管理班に托した。

「陸軍少佐奥山道郎之遺品」箱の表に墨書した。死んで少佐に進級する、これだけは絶対間違いないことだった。二階級特進と思っていた者もあったが、隊長が少佐と書いたので、ほかの者もそれにならった。

17日から22日まで、毎日出撃を予期して待機した。夕方になると、アア今日も一日命があったか、と思う。

待機間奥山たちは新海少佐とよく語り合った。第二独立飛行隊長新海少佐は、前年の7月までは挺進飛行戦隊の中隊長で、皆旧知の間柄だった。

——以下述べる新海とのやりとりは、生き残った山田中尉の述懐に拠る——

奥山隊が浜松に到着したとき、真先に迎えてくれたのは新海さんだった。相変らず鼻下に薄い髯をはやし、薄汚い飛行服をだらしなく着ていた。

「新海さん、あなたの爆撃ではきかないらしく、今度我々が行くことになりました」奥山が言うと、

「人間を爆弾代りに使うとはなアー」深刻な表情で奥山の顔を見つめた。

また別の席で、サイパン爆撃のことに話が及んだ。

「俺は三回行った。行けと言われれば何回でも行くが、二機や三機で爆撃しても蛙の面に水かけたようなもんだ」

「しかし、飛行場は火の海だったというじゃアありませんか」

「俺は真直向いて飛んでいたら知らん、後方射手がそんなこと言ってたがな、高度が低いから火が大きく見えたんだろ」

「爆撃では効かないから我々が行くことになったんですヨ、新海さんの爆撃万能論も駄目ですナ」

「馬鹿いな。敵を見ろよ、爆撃機は万能じゃあないか。総べて量だ。重爆重爆と大きなこと言っても、サイパンまで行ってこれないンじゃア話になら

ん。硫黄島中継はもう無理だな」

新海少佐はこのあと2月24日に飛行第62戦隊長に転じ、3月19日、部下特攻機の戦果確認に同行して未帰還となった。

硫黄島の状況は一向に好転せず、22

日になって一応延期ときまった。飛行隊の方は訓練を再開したが、奥山隊の方は体力練成だけで、決行の目途が立たないと、豊岡でやったような訓練をやる気がしない。毎日美食し、義烈空挺隊をもじって「愚劣食放題」というようになった。奥山は、

「グレックイホーダイか、うまいことを言うもんだ」と阿々大笑していたが、内心は深刻だった。奥山は持校室では、

「なるようにしかならんヨ」とか、

「なにをくよくよ川端柳、水の流れを見て暮らす」とか達観し切ったような態度を示し、また、そうなり度いと思っていたのかも知れないが、部下の前では常に激しい闘志を見せ、隊長室の壁には、B-29の見取図を張りつけたという。

ある寒い日、和田曹長（生残り大阪在住）が所要あって隊長室に入った。その頃は薪炭の使用が極度に制限され

ストーブも短時間しか焚けなかった。

奥山は底冷えのする部屋の中で、窓際に置いてあった金魚鉢を、ジーツと見詰めていた。

「オイ、当番室に湯が沸いていたら持ってきてくれ」

「お茶ですか」

「いや、湯だ、この金魚も寒かろう」金魚鉢に湯を入れてやろうという奥山の顔には、いつもの闊達さはなく、深い悩が読みとれた。

1月27日、菅原軍司令官は、第10戦隊長草刈少佐、第2独立飛行隊長新海少佐、奥山、諏訪部の両隊長を集めて意見を聴取した。尋ねられても誰にも名案はない。足の短い九七重を与え、硫黄島中継ができなければ、手の出しようがない。

その頃、敵の硫黄島上陸の企図は濃厚になって、サイパン攻撃よりも硫黄島戦備強化の方が急を要するようになり、大本営では1月30日になって、第6航空軍にサイパン攻撃の中止を指令した。

その頃奥山隊長以下が書き残した歌は沢山残っているがその一つ

いかならん事にあひてもたゆまぬはわがしきしまの 大和魂
小隊長宇都木五郎

本土上空の特攻

B-29に対する体当り ③

前号で関東地区の要撃戦闘における体当りについて述べたが、若干補足することがある。体当りしたのは震天制空隊だけではない。震天制空隊を出している戦隊で、その隊員以外で体当りした者も少くない。この会報25号には47戦隊の震天制空隊の特集を載せた

か、あの中に出てくる粟村准尉や吉沢中尉は、特攻隊に指定されていないのに体当り散華した。吉沢中尉については、会報20号に碑の写真と共に出版しておいた。

体当りをしたのは防空専任部隊だけではない。常陸飛行師団の小林軍曹と鯉淵兵長のことは、前号に機体掘出しの記事を添えて詳しく載せておいた。それ以外に第一練成飛行隊の倉井利三少尉は20年2月10日に、山本敏彰中尉は4月7日にそれぞれ体当りし、B-29を撃墜して戦死している。山本中尉については、会報20号に碑の写真も添えて出版しておいた。

関西地区防空戦闘の体当り

中京及び関西地区の防空を担当した

あったが、19年11月55、246の両戦隊は比島方面に転用された。

この地区でもB-29撃墜の為体当り戦法が採用された。第56戦隊古川良治戦隊長の手記が、「飛燕機動防空作戦」と題し、「B-29対陸軍戦闘隊」なる書物に

飛行部隊は第11飛行師団で、この師団に属する飛行部隊は第5、55、56、246の各戦隊で

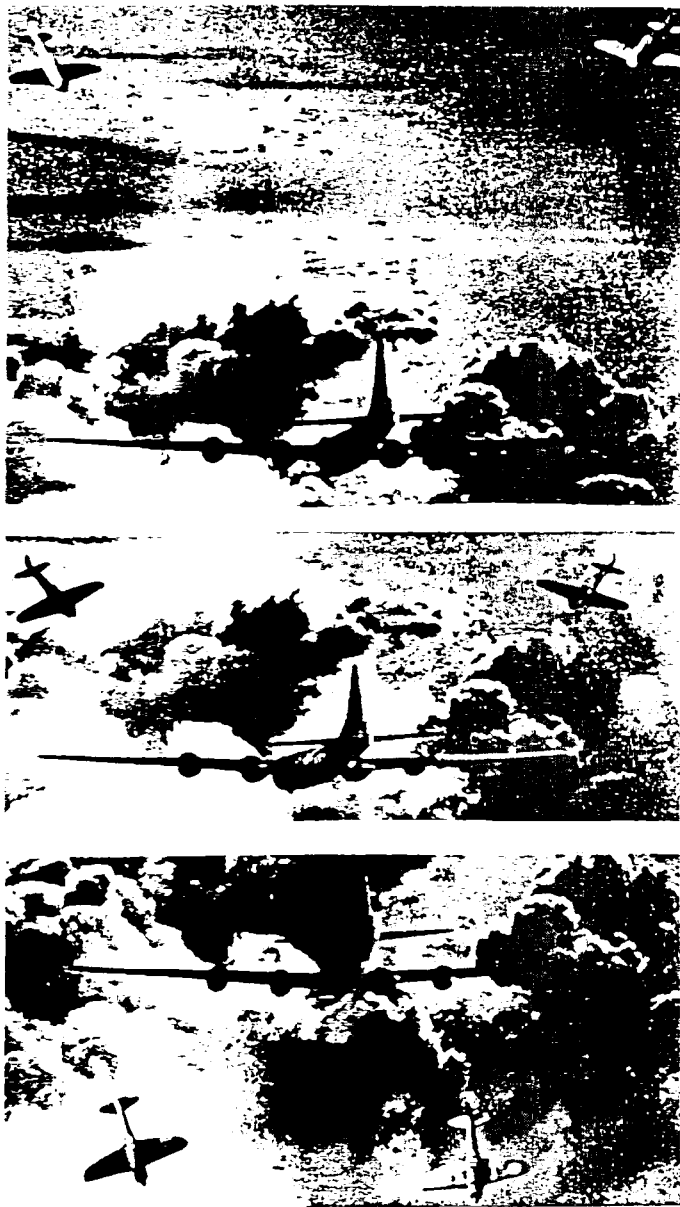
載っているのが出てくる個所だけを抜粋してみる。19年12月13日から22日に至る三次にわたる名古屋空襲は、高々度からする爆撃にもかかわらず、投弾はじつに確實であり、黒煙天に押し猛火は凄惨のきわみをつくした。

重工業地帯の損害は日につり、市街地の消失するさま、また人心の動揺は、空中かっ手をこまねいて望見するに忍びないものがあった。

こうして空中勤務者の心に流れ、顔に現われた無言の決意が、捨身の戦法となり、体当りを取行せしめたのである。

昭和20年正月3日の第四次名古屋上空の邀撃戦闘は激烈をきわめた。

天気は快晴であった。卓越西風、いわゆるジェット気流は伊丹飛行場を離陸し所望の高度を獲得する前に名古屋上空に到着するので、名古屋上空で直ちに西に反転して九五〇〇から一万



要撃の一場面（米軍の撮った写真）

メートルまで上昇していった。

この付近になると、快晴のときでも水片がきらきら光って、飛行機の胴体から翼端へと吹き流れて行く。寒さは手足や体にヒシヒシと感ぜられる。酸素吸入器の流量計は目盛り一杯を指している。発動機は全開運転で、毎分二四〇〇回転を示している。操縦索には不凍油を塗布してあるが、それでも重みを感じる。

人機ともに全智全能を傾けていなければならぬのだ。ちよつとでも油断すれば、機はたちまち高度を減じ、敵機に対する攻撃ができなくなる。かくして戦隊の各機は、要地上空に集結、態勢を整えて待機していた。間もなくB29第一梯団一〇機編隊に対する真正面からの撃ち合い戦闘が開始された。第二梯団、第三梯団が来襲するにつれ、彼等の航跡雲は要地上空に錯綜し、壮絶言語に絶するものがあった。

この間浦井機は無我必死体当りの攻撃を敢行し、敵機と運命をともにし、名古屋市東方山中に落された敵機の位置からやや離れた地点に激突、壮烈なる最後を遂げた。彼の同期代田中尉(五五戦隊所属)の戦死もまたこの戦闘でのことだった。

高向機(少年飛行兵一〇期)も敵機に肉薄、必殺の射撃を敢行しつつ敵の

尾部に体当たりし、愛機はこのため左翼端を吹き飛ばし、数発の弾痕をとどめながら、よく基地に掃投することができたのは奇跡というほかはあるまい。

この手記は同戦隊の要撃戦について日を追って書かれているが、体当りの史実がないので省略し、翌20年6月26日のことを引用する。

六月二十六日、夕張(伊賀)上空における戦闘は、敵戦爆連合部隊との戦闘であった。

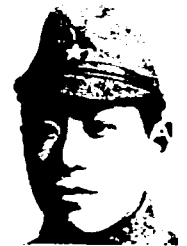
中川少尉(特操第一期)はB29に必殺の体当り攻撃を敢行した。

浜田機はP51と交戦中被弾し、落下傘降下によって奇跡的に生還を遂げた。

永末大尉また被弾、不時着のさい重傷を受けた。

なお中川少尉の母はその霊前に束髪を切って供えられたと聞く。

特操一期生史に中川少尉のことが出ているのでそれを紹介する。



飛行第五十六戦隊

中川 裕

(同志社大卒・大刀洗・陽之匠)

20・6・26 空戦死

日、津地方の空は今と同じように青く、明るい日差しが輝いていた。同町二本木、延寿寺住職、富山賢海さん(六九)は、遠くから響いてくる空襲警報のサイレンに表へ飛び出した。上空を日本の戦闘機「飛燕」が

白山町上空

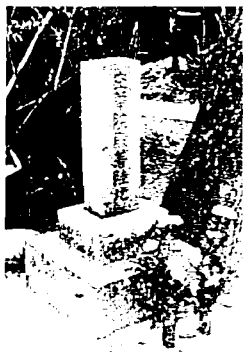
B29に体当たり

中川大尉の霊を慰める「平和之礎」

津空襲の日 二十六日に三十三回忌

一志郡白山町白山台で二十六日、二機、敵機を待ち受けて旋回している。「平和之礎」の三十三回忌慰霊祭が行われる。見ると、東の空からB29十一機の編隊が迫ってきた。小さな「飛燕」の編隊が身をひるがえすと、敵機の編隊に突っ込み、編隊長機に体当たりした。敵機は右翼をたたき折られ、空中分解して同町惣谷付近に墜落、「飛燕」もバラバラになって白山台一帯に落ちてきた。「ヒラヒラとゆっくり落ちてきた主翼の日の丸が、空の青さとともにマブタに焼きついています」と富山さんは当時を回想する。

空中で自然に開いたパラシュートに下がった遺体は久居市の真光寺本堂前の松の枝にひっかかり、地元の人たちの手で葬られた。大三地区の人たちは散乱した血染めの「飛燕」の破片を拾い集め、公民館に安置して通夜をした



ハラシュートのひっかかった松と碑

三十三年前の昭和二十年六月二十六

あと、現場に木の墓碑を建て、戦後も清掃や献花を欠かさなかった。

遺品から「中川裕大尉」と名前だけはわかっていたが、二十三回忌を迎えた四十二年六月、手を尽くして身元を調べたところ広島県大竹市波波町出身で、当時まだ二十四歳の若者とわかった。さっそく広島から遺族を招いて法要を営み、これがきっかけで翌年、白山台南端の神社西側に今の「平和之礎」が建った。

三十三年前のこの日は津市をはじめ四日市、伊勢、松阪市などが大空襲を受け、津市だけでも百七十四人が死んだ。県民には忘れ得ぬ日。三十三回忌には中川さんの実弟で岩国市室木、国鉄岩国駅長、中川正彦さん(五一)夫妻のほか地元の人たち約百人が参列、富山住職ら八人の住職が読経をあげ、めい福を祈る。遺族の中川正彦さんは「実母りりつさん(八一)が高齢のため参列できませんが、地元の方からお礼を申し上げたい。これからも単なる慰霊碑でなく、その名の通り平和を守る礎であってほしい」と話している。

B 29 に対する体当り①の補遺(一)

352 空坂本幹彦中尉関連記事

飯野 伴 七

11月21日早朝「連雲港地区空襲警報発令」の情報を入電。○八二〇月光八機が大村西方の所定哨区へ発進、○九五神崎大尉の率いる零戦三三機、雷電一六機が発進、大村方面哨戒を実施。敵B 29約百機大村方面に侵入、七機乃至一二機編隊の敵に対して高度七五〇〇米付近にて戦闘機隊が捕捉、猛撃を加え攪乱させたが、とくに三号爆弾攻撃は敵編隊の攪乱分散に有効であり、爾後の攻撃を容易にした。

この戦闘の結果撃墜確実一二機、火を吐かしたものの(不時着確実と認められる)一〇機、黒煙を吐かしたものの(不時着の算大なり)七機、相当の命中弾を与えたもの一四機の合計四三機を撃墜破した。これに対する損害は零戦未帰還一機、被弾一六機。地上被害宿舎附近至近弾の為宿舎中破、使用不能となった。

この邀撃戦闘で零戦隊の坂本幹彦中尉(海兵71期)は、第二小隊の隊長機として長崎上空でB 29一五機を発見するや、三番三号爆弾攻撃を加え更に機

銃攻撃を重ね、全弾打ち盡しすやB 29に体当りして撃墜し、長崎県下の刃良岳附近で壮烈な戦死を遂げた。同時に清水貞

治飛長(特乙1期)も同じく体当り攻撃をしようとしたが、寸前にて被弾火達磨となり自爆した。坂本機は刃良山系の経ヶ岳山中で発見された。

坂本中尉は平素は無口で静かな性格だったが、出撃直前列機に対して「本日もし上空で機銃が故障すれば体当りあるのみ」と決意を漏らしていた。

月光の斎藤茂少尉(予学13期)は五島列島西方にてB 29一機を撃墜し、右エンジンに被弾し策盡きて不時着水機体は沈没したが搭乗員は無事であった。機長の斎藤少尉と偵察員奈良三郎二飛曹(乙飛18期)は帰隊して初陣の戦果を賞められた。

福山清隆中尉は戦後米軍のメジャー・ホワイトから得た話を次のように証言して居る。

朝鮮戦争が始まって間もない昭和25年7月、私は当時調達庁の担当官として立川基地で米軍と折衝していた。たまたま通訳が相手側の米軍受領官のメジャー・ホワイトに私を戦時中に零戦パイロットだったと紹介したことから、ホワイト少佐が「成都の第二十爆撃飛行団にいて11月21日の大村方面の攻撃に参加した。その日はB 29一〇五機が出撃したが未帰還機が六九機に達し、僅か三六機しか帰還しなかった。あの時の日本の戦闘機隊の攻撃は強力だった為損害が多く、その後の九州攻撃が脅威になった」と語った。

当日九州方面悪天候の為B 29の一編隊一三機が上海方面に來襲、ドック及港灣施設を爆撃し当直配置の上海25空零戦二機が邀撃したが撃破に止まり、隊長厚地篤彦中尉(海兵71機坂本中尉と同期)が被弾、東方洋上に墜落戦死した。

寺崎隆治司令は直に次のような坂本中尉に対する功績具申を行い、翌日大本宮発表があり、坂本中尉の武勲が全軍に布告され海軍少佐に特進した。

「三五二空機密第一号ノ一三三(軍極秘)三五二空付 海軍中尉 坂本幹彦 右は当隊戦闘機隊第二小隊長として零戦九機を率い命により11月21日〇九度、八五〇〇米の邀撃配備に就き哨戒中、一〇一五敵B 29一五機を発見、三号爆弾攻撃に引続き猛烈果敢なる直上方攻撃を反復し相当の損害を与えたり。(敵機中火を吐かしたるもの二機黒煙を吐かしたるもの二機命中弾

を与えたるもの三機)

小隊長は尚も徹底的戦果を挙げんとし列機と分離一〇三〇頃敵編隊の外端機に上方より壮烈な体当りを敢行せり。

右敵機は忽ち難様状態となり島原北方海面に墜落し小隊長機は体当り墜落し、墜落と同時に約四千米圏内に飛散したり(地上調査による)

右は小隊長と行動を共にせる海軍中尉伊吹明夫、同久保一男、海軍飛行兵長嘉茂保夫の視認及び陳述に依り明かなり。

本体当りは計画的に実施したるものにして、坂本中尉は当日出発前部下に対して本日攻撃効を奏せざる場合は最後の手段たる体当りを敢行する旨言明せり。

右の行為は真に軍人の龜鑑にして二階級進級至当の者と認め茲に具申す。

この戦闘で、大村市民の代表が三五二空を訪れ、戦闘参加搭乗員はもちろん隊員一同に感謝の言葉を述べた。また、この戦果に対して、東久邇宮防衛総司令官、杉山佐世保鎮守府司令長官から部隊感状が授与された。

この日、撃墜したB 29一機が有明海の諫早沖で発見され、直ぐに収容作業にかかり大村の二十一空廠へ運ばれて、原型修復が行なわれ隊員が検分した。

B 29に対する体当り①の補遺(二)

宗 文朗少尉体当たりしたこと

岩 田 辰 夫

「特攻」29号24頁に、(12月7日の防空戦闘)として戦隊や蘭花特攻隊の戦果について記述がある。

ここで特筆すべきことは練成飛行隊の戦果もあったということである。

即ち、11月下旬、第4練成飛行隊における課程を終了し、深井子飛行場から奉天北飛行場に移駐した幹部候補生並びに特別操縦見習士百一期生約三〇名は、赴任命令を待っていた。

12月7日のB 29の来襲はそのさ中の事であった。飛行服類は返納してなかったが、空襲警報とともに、外出者等の飛行服に身を固め、酷暑零下30度という上空に飛びたった。宗文朗少尉(特操1期)もその一人であった。

1式戦II型をかり、高度約5千の上空でB 29の梯団に遭遇、うまく1機を捕捉、全上方攻撃をかけたが、敵弾が単のエンジンを貫通、飛行服の股間をも貫き、ペラーは停止しかけて、絶体絶命かと思われたが、速度計を見ると500キロを指しているの、咄嗟に急上昇の舵を引き、運良くB 29の尾部

に食らいついた。

その弾みで単は背面になり、安全バンドをしていなかった宗少尉は空中に放り出された。末端の

フックは掛けていたので、落下傘が開き北西風に流されながら満人の農地に落下した。

農具を武器に集まってきた満人たちにアメリカ兵と間違われた宗少尉は、

「オーデリーペンピン」(俺は日本兵だ)と叫んで事無きを得た。(この事があって飛行服の両袖に日の丸を縫いつける様になったという)

けれど、落下傘の開傘の衝撃で二重の手袋、半長靴は脱落、両手両足ともに酷い凍傷となり、部隊長林弥一郎少佐に戦果報告後直ちに奉天陸軍病院に入院した。

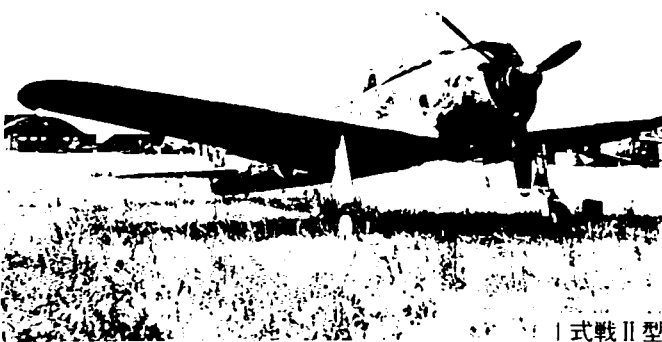
体当たり生還は極めて稀なことであり、しかも練成飛行隊の課程終了の戦果として賞賛された。

昭和20年3月10日、山田乙三関東軍司令官は、その武功を称え、感状と陸軍武功章を授与、宗少尉は陸軍中尉に特別進級し

た。

飛行第33戦隊付きの発令が出たが彼は全治2ヶ月の重傷の為、赴任できず退院後、練成飛行隊付きに復帰、教官として後進の教育に従事していたが、教育中の事故により、重傷を負い、7月14日戦傷死した。

戦死後陸軍大尉に任せられた。大正12年3月、長崎県南松浦郡有川町(五島列島)に生まれ、長崎師範の出身。



1式戦II型

レイテに消えた

薫空挺隊と地上義号隊

会員 添田 裕吉

昭和19年12月2日、大本営発表『陸軍中尉中重男の指揮する我特別攻撃隊薫空挺隊は11月26日夜輸送機四機を以てレイテ島ドラッグ及ブラウエン敵飛行場附近に強行着陸を敢行せり。我偵察機の捜索によれば爾後右空挺隊は両飛行場の要部に決死突入、大なる戦果を収めたるもの如し』

ラジオ放送に続いて新聞は「内鮮台一体の特攻隊」操縦士も共に斬込「主兵器は特殊爆薬」義勇力を腰に台湾兵士「等紙面トップで詳報を伝え、日本ニュース二三七号(12月15日)はリパ基地での訓練映像を全国映画館に流した。

薫空挺隊は敵中強行着陸の台湾高砂兵特攻隊として国民の耳目を集めたが、飛行機不足で海路出撃レイテで全滅した同部隊の高砂兵や、飛行場部隊出身兵については殆んど記録がなく、まことに残念哀惜に堪えない。以下断片資料を捜し編綴して概要を記す。

昭和19年6月米軍はサイパンを占領

し次は比島方面進攻が予想され始めた7月、台湾から高砂族義勇兵基幹の第一遊撃中隊(隊長尾山盛大尉)一九〇名がリパ飛行場に到着し

た。任務は敵飛行場へ強行着陸を敢行し奪回占領する特攻隊で、作戦名「義号」から義号部隊と称し、後に第四航空軍司令官富永中将が薫(カオル)空挺隊と命名した。

遊撃隊はジャンゲル戦専門部隊で主力は台湾山中の高砂族志願兵が占め、将校下士官の大半は中野学校出身者、衛生通信兵のみ内地人であったが、朝鮮籍二名(金原庚鎮伍長・金川見球上等兵)も含まれていた。なお第二遊撃中隊はマニラ発モロタイ出撃、戦後三〇年目に中村輝夫氏復員話題となる。

当時筆者はリパ飛行場の第五〇飛行場中隊指揮班勤務で、高砂兵の軍事書が数日毎に届いていた。台湾〇〇部隊の親兄弟や先生宛で、大部分は素朴なカタカナで「テンノウヘイカノタメ・シニマス」等日本兵として決意や故郷家族への思慕が切々と書かれ、純情まことに胸迫るものがあつた。

第四航空軍では遊撃隊の敵飛行場斬込に当り、飛行基地の様子に明るい飛

行場部隊の支援が必要との判断から、7月からルソン島中部地区展開の約一五の飛行場大隊・飛行場中隊(以下飛大・飛中と略記)から支那事変歴戦者や整備優良者約二百名を選抜、義号部隊に配属した。現在判明した差出部隊は次の通り。(リパ地区)八六飛大、宮田茅富貴中尉・篠崎皎少尉・木下敏一軍曹等三三名。五〇飛中、林喜逸軍曹等一〇名。(マニラ地区)一三飛中、滝川英隆少尉・正田軍曹等一名。四七飛中、中島少尉・神原軍曹等一八名。(クラーク地区)三一飛大、橋口淳中尉等約六名。五二飛中一〇名。その他不詳。

本件は富永軍司令官の特別秘密命令であつた模様で公刊戦史その他記録は見当たらない。

リパでの訓練は(跳降突撃)飛行機が着地した途端転げ落ちる様に飛び出し敵機に爆雷を仕かけ蛮力を振っての突撃が主で、連日連夜飛行場外の椰子林で九九式双発軽爆撃機を使って行われていた。高砂兵は夜目遠目が抜群で裸足で敏捷に行動、日本兵は目を馴らすために昼間は遮光眼鏡をかけていた。

10月20日、米軍は数百隻の大艦船団でレイテ東海岸タクロバン平野へ進攻、天地を轟す艦砲射撃大空爆の後一

〇万の兵を揚陸し、多数の戦車を先頭に攻撃を開始した。守備隊第一六師団(垣)二万は一丸となって奮戦したが及ばず、数日間で八割を失い後方ダガミに撤退した。ブラウエン飛行場を占領した米軍は直ちに使用を開始、マニラレイテ間の増援船団を片っぱしから撃沈した。増援は第一師団(玉)第二六師団(泉)第六八旅団(星)高階支隊・カモテス支隊等と続いた。

11月22日義号部隊に四航空特別秘密命令(富永司令官が朱書加筆)が届き26日夜ブラウエン飛行場に着陸攻撃が決定した。使用飛行機は当初の九九式双発軽爆撃機は数次の空襲で撃滅し、又搭乗人員も少なく乗降不便のため、シンガポールから空輸した二〇八戦隊の零式輸送機(ダクラスDC三型)四機を使用六〇名で決行、残りの三百余名は海路出撃のこととなった。以下空路組(薫空挺隊)海路組(地上義号隊)の行動は次の通り。薫空挺隊だけが特攻扱となっている。

〔薫空挺隊〕

11月25日、富永軍司令官は空挺隊激励にリパ飛行場に到着。隊員を前に「諸君に会ったことを光栄に思う、この壮挙の成功疑いなきを信ず、諸君の遺芳は万古千古に薫るのである」と手

袋を脱いで中隊長以下全員と握手激励した。中将閣下が下級兵士ひとりひとりに親しく言葉をかけ握手迄賜る事は異例中の異例で、高砂兵一同無上の光栄と感激した。

編 成 隊長 中 重男中尉

(隊員六〇名)

第一小隊長 中 重男中尉(兼務)

甲斐将夫曹長・清水敏次伍長

兵二二名

第二小隊長 須永富蔵少尉

石田歳徳曹長・八木橋俊秀曹長

以下同

第三小隊長 川原英雄少尉

浜田 新軍曹・金原庚鎮伍長

以下同

第四小隊長 加来 隆少尉

木下敏一軍曹・中村 寛軍曹

以下同

裝備 破甲爆雷・特殊爆薬・機関銃・手榴弾

他一般兵装(高砂兵は義勇力)食糧

三日分

輸送隊(飛行二〇八戦隊) DC三型

四機

一番機 桐村浩三中尉 田中正澄軍曹

二番機 五藤 武准尉 北 史軍曹

三番機 大沢正弘中尉 塚田弘治軍曹

曹

四番機 寺島近馬准尉 高木 弘軍曹

乗員は胴体着陸後陸戦・全員斬込を断つた。

参加

薫空挺隊は11月26日午後10時40分りパ離陸、翌午前1時頃突入見込みであつたが詳細不明。飛行七三中隊の偵察機によれば、27日午前1時過ぎブラウエン飛行場上空進入に対し、通例の激しい対空砲火が無く突入は成功と判断された。米軍記録では一機はブラウエン北飛行場突入に成功、米軍と交戦多数の飛行機を破壊し全員壮烈な戦死をこげた。二機はドラグ南方海岸に達しそれぞれ米軍と交戦後山中に後退、数日間ゲリラ戦を繰り返す米軍を悩ませた。最後の二機は誤ってオルモツク海岸(一説にはバレンシヤ飛行場)に着水し、三五軍司令部に出頭したので参謀副長友近美晴少将が、汚名挽回のためブラウエン飛行場攻撃中隊の小泉挺身隊に配属斬込を命じた。小泉挺身隊は第一〇二師団(技)の学徒出身少尉を中心にセブで編成、バンカーでオルモツクへ到着、12月7日ブラウエン飛行場に斬込を敢行した。不時着機(加来少尉の第四小隊)の一行は直ちに追究したが、後述の様に險阻な山岳行に時間を費し斬込に間に合わ

ず作戦中止となり、山中北進を続け12月末カンギボットで加来少尉以下一〇余名が一時高千穂落下傘部隊の指揮下に入り、その後第二六師団へ移り消息を断つた。

以上が薫空挺隊の大略で生還者皆無である。

(地上義号隊)

遊撃隊残部約一〇名と飛行場部隊約二百名は、一週間分の食糧を持ち11月29日から三組に分れ、マニラより多号七次船団(陸海合同輸送作戦名)に分乗出発した。

第一梯団 陸軍輸送船三隻・駆潜艇一隻

11月29日マニラ発、30日イピル着、遊撃隊豊田准尉以下二八名乗船。

第二梯団 陸軍輸送船二隻

11月30日マニラ発、12月1日ピリヤバ北方三杆シラド湾で撃沈され、遊撃中隊長尾山大尉以下五九名全員海没戦死。

第三梯団 海軍輸送艦三隻、駆逐艦二隻、12月1日マニラ発、2日イピル着。遊撃隊茶園曹長以下二一名乗艦。

飛行場部隊二百名は第三梯団分乗の模様。

地上義号隊については遊撃隊生還者の

茶園曹長報告が僅かにあるだけであつたが、本年飛行場部隊生還者中島節蔵氏(学徒将校?部隊住所不明、復員後帝国銀行勤務?)が戦友篠崎皎少尉(八六飛大)遺族宛昭和21年12月投函の私信コピーを入手したので漸く概要が判明した。

イピルに上陸集結した義号部隊は海没で五九名を失い二五〇名となり、直ちに第二六師団指揮下に入り12月3日頃ブラウエン飛行場奪回攻撃に出発した。イピルブラウエン間には険しい脊梁山脈(二〇〇〇米)が聳え立ち、雨も多く道なきジャングルの行軍は難渋を極めた。漸くブラウエン飛行場を望む山頂附近(ルビ)に達し食糧も尽きた12月8日作戦中止。北方転進となつた。中止理由は12月6日高千穂落下傘部隊が降下突入し、同時に第一六師団(垣)第二六師団(泉)も相呼応して攻撃したが不成功に終り、12月7日西海岸イピルに米軍一ヶ師団が突然上陸戦況激変の爲であつた。

(地上義号隊行動を中島氏は次の様に記す。一部省略及簡記)

私が篠崎君(八六飛大)と一緒になつたのは19年8月ルソン南部リパでした。富永中将が航空隊の決死切込隊(義号部隊)約一個大隊をつくり、私も篠崎君も決死隊に入りました。

地上義号隊については遊撃隊生還者の

軽爆撃機に乗り敵飛行場に強行着陸して敵機を焼拂う訓練をやり、いよいよレイテへ出発する時、軽爆が敵機にやられ数が減り乗る分がなくなりました。一部だけ旅客機にのってレイテへ向いこれがお存じの薫空挺隊です。私達は一週間分の食糧を持ちレイテ西海岸のイビルに夜コソソリ上陸しました。海上で私達の船の一隻はアメリカ戦闘機に攻撃され海没しました。残った私達は準備をなし中央高地へ行かせられました。上陸後一週間で食物も無くなり困りました。中央高地から少し行った所にアメリカの飛行場があり切込をやる筈でしたが戦闘する事なく転進となりました。日本の飛行機は一機もなくアメリカの飛行機が始終飛んで発見されると山向うから迫撃砲の弾丸が飛んできます。食物無き山中放浪生活と毎日の飛行機迫撃砲に悩まされ、飢えと一日置きに降る雨と熱帯病、フィリピンの兵隊に悩まされ誠に悲惨な生活が始まりました。

転進はレイテ西北の高地を通り海岸に出てセブ島に逃げる事でした。最初三百名許りの部隊は12月末には七八〇名に減っていました。熱病その他砲弾のためちりちりばらばらになりました。正月3日高熱の篠原君は西海岸の見える丘で富田中隊長に抱かれ目を

閉じられました。(以下略)

地上義勇隊はイビルから国道を南進しアルペラ北方より山中に入りルビヨリ転進、尾根伝いに北上ダナオ湖を経てバレンシヤ辺りで国道を横断しカンギポットに達し消滅した。

茶園曹長(故人)の記録によれば高砂兵グループ五〇名は転進時第二六師団司令部の警護兵となり山中縦断、20年2月カンギポット附近に達した。そ

の後敵の攻撃下食糧や塩、薬欠乏し生ける。(元第五〇飛行場中隊)

地獄の日々を送り次第に消耗、7月頃師団長側近に高砂兵二名、参謀長には茶園曹長・高砂兵三名が居り、終戦後茶園曹長高砂兵一名のみ復員した。

レイテの山野に誰知る者なく、むなしく果てた義勇部隊将兵の冥福を祈り、特に民族の誇りをかけて戦った忠勇無双の高砂族兵士と、一片の公式記録も無い飛行場部隊兵士の為本記を捧

薫



ニュース映画の一瞬

(第237号 昭19・12・15)

このほか会報22号に多数の写真あり

知覧特攻平和会館に

仏像奉納に伴う参拝

陸士60期 中村 治

平成8年5月号の会報「特攻」に投稿し掲載して頂きましたが、私の仏像彫刻の師石賀正大仏師作の聖観世音菩薩と、私の拙作雲上の救世観音菩薩を昨年11月1日に特攻平和会館に奉納しました。会館側からは、謝意とともに仏像と英霊に捧げる言葉の額を、カラスケースに入れて仮安置したい旨の電話がありました。年更まって去る3月13日妻を伴い知覧に参りました。

館長様をはじめ職員の方々の御出迎を受けましたので、よくぞ五十年の間英霊を御守り頂いた知覧の方々に御礼を申し上げます。その後一〇三六名の英霊の前に花束を捧げ額いて参りました。

私は義烈特攻隊が発進された熊本一の健軍に、自衛官として勤務したこともあり、また先輩の52期田中賢一様の著書により、義烈特攻隊員の特攻に至る迄の諸行と遺書、遺詠を存じておりましたので、遺影の前で只々涙の合掌でした。特に特攻隊長陸士53期奥山大尉殿の遺詠「散れや散れ阿波岐原の若桜散るこそ汝の生命なりけれ」と拝読し、覚悟も既に通り越し、禪の極地か

ら自分の使命とさだめを述べられていくことに深く感銘致しました。

私が仏像彫刻の道に進む動機の一つには義烈特攻隊の中の第三独立飛行隊長陸士51期諏訪部大尉殿があります。

この方の遺書は、大慈悲の文字と白衣観音像であり、また出撃前夜木片に観音像を彫刻して胸に抱いて散華されたことは、釈迦が行ったとも言われる五体投地で仏教の極地……その崇高、清純な御心底には只々頭が下るのみでした。またここを訪れ当時私の同年齢の少年飛行兵の方々が、特攻前未だ童顔の飛行服の姿で、無心に子犬とたわむれる写真には、胸がしめつけられました。父母への先立つ不幸をわびつつも「悠久の大義」につくの遺書には、涙を禁じ得ませんでした。

私達の奉納した仏像は、一式戦闘機の右側に安置されておりました。その右数米の屋外に特攻隊員が起居した三角兵舎の入口があり、特攻隊員の出撃された心情と奉納した私達の気持ちを御観察下された最高の安置場所でしたので、このまま置いて頂きたいと申しました。参拝に訪れる観客が次々と来館し、特攻作戦とは如何なる作戦か、特攻隊員と出撃遺書遺詠等について会館の職員の手をこめた説明を聞き、涙し合掌しながら遺影遺品を拝みながら

行かれる方々も少なからず見受けました。参拝される方々は、ほぼ全員十五歳未満で、特攻の事実を始めて知り、若くして国の安泰を願いつつ散華された英霊に涙を流しながら頭を垂れている若い娘さんが印象的でした。

この光景をみて、戦後のこの偉業も一切報道されることもなく慰霊も等閑にされ、最近の教科書問題でも慰安婦問題、南京虐殺問題のみを取上げる教育行政を見るにつけ、私達の子弟への将来に大きな不安を感じます。私達も七十歳を過ぎ残された人生も僅かです。特に特攻のことは機会をとらえて将来を担う若人に語りたいたいと思いません。それにつけても、往時特攻隊員を支援し萬全の御世話をして頂いた知覧の方々、戦後五十年の間、親から子孫

への申しついで英霊を御守り下さる状況には頭の下がる思いで一怀でした。最近とみに日本古来の美風が崩れゆく時、この薩摩の地と人に脈々と受けつがれているのを拝見し、心休まり、心暖まる旅でした。

英霊に捧げる言葉

わが国土沖繩に侵攻した敵艦船を、死をもって撃沈するため、特攻を志し尽きせぬ家族への思いも断って沖繩へと天翔ったその気高く崇高なお姿は正に雲上の救世観音なり。時は移りてもなお雲は流れる。我等空を仰ぐ時、必ず英霊に合掌し、必ずその偉業を語り継ぐとともに、この世をできるだけ正しく次代に申送ることをお誓い申し上げます。

中村 治



日頃思っていること

会員 小崎 武

丁寧な文章で書かれ、その企画・構成の大変立派なこと、に、厚く敬意を表するものであります。

私は、昭和五十一年三月に回天刊行会発行の、「回天」と言う本を持っておりませんが、その序文に元第六艦隊水雷参謀の鳥巢建之助氏が、次の三点を述べておられます。

その第一は、回天勇士の霊前に捧げご遺族をお慰め申し上げる。

その第二は、我等斯く戦えりと言う証を、子や孫に伝えるべき真実の姿を残したい、と言う悲願による。

その第三は、回天の若人達の至誠・純情を、特に今後の日本を背負って立つ若い人々に、感得してもらいたいとの願いによる。

そして最後に、「もし、現在の若人たちの幾人かでも、本書によって真実の愛を感じ得たならば、回天の勇士たちの死は栄光に輝き、在天の御霊は慰められ、ご遺族たちも又ご満足されるものと思うのであります」と結んでおります。

所で私は、会報「特攻」を相当長期に渡って読んで居り、特攻慰霊祭を始め、各地の行事・当時の特攻の戦記・日記等々毎回写真入りで詳細かつ懇切

丁寧な文章で書かれ、その企画・構成の大変立派なこと、に、厚く敬意を表するものであります。

従いまして、「特攻」の編集の目的も、前記「回天」の序文の範疇に入るものと、推測するものであります。

其処で最も苦心するものは、前記の第三ではないでしょうか、今日の若者たちは、戦後日教組の反国家反権力的な教育を受けた為に、日本古来の美風は失われ、歴史伝統は否定歪曲され、

権利のみ主張する無国籍集団と化してしまい、我々の主張など到底受け入れられないのではないかと、苦慮しているからであります。例えば、去年の十一月二十三日のテレビ朝日放送に、「激白・元帝国軍人五十人の戦争と平和」に

は、数十人の大学生らも参加していたが、数人の発言の内容を見ても、天皇のご存在に無関心であり、戦争は悪であり、日本は侵略をして外国に災害を与えた、平和憲法のため日本は平和で

良いと言う。私は此のテレビを見て愕然とし、この若者達はもう救いがたいと痛感し、心から嘆息したものであります。

このように日本人の顔はしているものの、意識的に変質し無国籍集団とな

り、似非日本人となってしまうと思わざるをえないのであります。

戦後五十二年、日教組の教育的効果が想像以上に現れて来たものと、慄然としこれが方向修正は百年河清を待つ

の感をしております。これは、正に肇国以来の民族伝統の危機であると断言せざるをえません。

細川総理は総理に就任するや「前大戦は侵略戦争であり、間違っていた」と公言し、何の恥じる所がなかった。誠に恐るべき発言と思う。

続いて社会党委員長村山富市氏が総理大臣になると、侵略戦争の他に「謝罪と賠償」を付け加え、朝日新聞等ははしやぎ立てる始末であります。

また、平成七年の中央に於ける全国戦没者追悼式では、「前大戦では、アジアの諸国民に大変な苦しみと悲しみを与えた。私はこの事実を謙虚に受け止

め、深い反省と共に謹んで哀悼の意を表したい。」と述べている。これがわが国の総理大臣の追悼式に於ける式辞かと、呆れ返るとともに、心の底から怒りがこみ上げて来ることを、どうしても抑える事は出来なかった。そこは日本の追悼式であるにもかかわらず、戦死者に対して誠に無礼且つ無慈悲・

非常識な言葉を吐く、総理大臣としては全く失格であり、恥ずかしいやらで

外国の冷笑を浴びたに違いない。

更に、平成七年六月九日衆議院では、所謂「戦後五十年の国会決議」が、半数以下の賛成で採択されたという。果たせるかな此の国会決議に対する各新聞・各識者等の論評は惨憺たるものであったことは、けだし当然のことであります。流石の朝日新聞でさえも「これが、戦後五十年に当たって国民を代表し、過去を反省して未来の平和を誓い合う、という国会決議の有り様だろうか、折角の機会に泥を塗られたいが付かぬまま、新進党が全員欠席したほか、与党からも大勢欠席し、結局賛成が議席の半数にも満たない異常な形になってしまった。やり切れないものを感じ悲しい気持ちである。」しかし中身の論評が無いのが朝日の欠点である。

私は今の五十代の世代まで、日教組の前記教育の洗礼を受け、これを応援した革新政党を始め左翼陣営・進歩的文化人・マスコミ等、米国の占領政策特に東京裁判の判決を、随喜の涙を流して奉仕してきた輩の言動に、日本人としての自覚も誇りも捨て去っているものと思っております。

此処において我々は現在、戦後五十二年にして歴史観においても、精神史

親においても総決算を迫られている事は、時代の趨勢を遠観せる識者に依つて、既に警鐘は乱打されていることは、皆さんご承知の通りであります。

其処で、評論家の西尾幹二氏は、歴史教育の一端について次のように述べております。「明治維新は、明治天皇の圧政が生み出した良からぬ変革で、維新以来日本は日清日露を始め侵略の、歴史を繰り返して、遂に太平洋戦争を引き起こした。という具合の史観が今なお教科書に書かれていた、或いは歴史教育学会を覆い、学校では毎日の授業で先生が子供たちに吹き込んで居る。

センター試験の政治的偏向は氷山の一角にすぎない。国民の歴史常識から著しく食い違った昭和二十年代の亡霊が、未だに彷徨っているのが歴史教育の現場の偽らざる姿である。」と。

ついでに現場の声を、山口県の山田光寛氏に代表して、彼は次のように述べております。「今や学校は荒廢の一端を辿っているといっても過言ではない。いぢめを始め、登校拒否は当たり前、中学生のテレクラによる売春、援助交際、そして覚醒剤経験者も既に検挙されている。すべての責任を学校に着せて、自らの責任を問はうとしない保護者・PTA・マスコミ・地域住民等が幅を効かせているようでは、学校

は決して良くならないのである。良き教師も育たないのである。その教師は学校を愛さない。文部省検定済の教科書が、非愛国的な代物であることが象徴している。自らの国を愛し、誇りに思う事が疎まれる今日、教育の真の正常化や日本の教育の復興は急務であると思う。生徒は日本の素晴らしさを言えば、目を輝かせて喜ぶ。この素直な子供を世界に通用する日本人にしなければならぬ。私の学校にも共産党の教師はいる。毎日が戦いである。」と。

もひとり茨城県の福持二郎氏にご登場を願います。「私が教員になった昭和40年頃は、明治三十年後半生まれの祖父母が未だ健在で、日露戦争以後のわが国の様子について、生徒達による聞き書きの学習形態が存在していた。しかし祖父母との同居が少なくなった

現在は、聞いて調べる学習は困難な状況である。そこで私は、近代・現代史の地域に眠っている明治維新以降の史跡などを掘り起こして、「歴史の語り部としての教師の役割」を果たしたいと思つて居る。郷土を愛することも人を愛することも、子供たちが生活している町の歴史のなから見つけ出すものではないか。」

こう言う真摯な先生には、私は大変勇気づけられるものがあります。では

ここで、子供たちはどんな教科書を使っているか、さわりの部分を列挙してみたい。

- A・女性を慰安婦として従軍させ、ひどい扱いをした。(日本書籍)
- B・東南アジアでは、占領を非難する人々を虐殺した。(教育出版)
- C・女子達が侵略戦争の犠牲になった。(帝国書院)
- D・南京事件の犠牲者数は、捕虜や一般市民を合わせて十数万人と推測：極東国際軍事裁判では二十数万人と言われ、中国は三十万以上とする。(日本文教出版)
- E・(ベトナムで)日本軍に大量の米を奪われたうえに、冷害などの災害が重なり、多くの人が餓死した。(東京書籍)

以上今年の四月から使われるという教科書は、これでもか、これでもかと、誠に自虐的で反日的であることか、これでは生徒から「こんな酷いことばかりしたのか」とからかわれて、返答に窮し困惑する教師の顔が目につかんでしようというものではないでしょうか。

そう切歯扼腕し慨嘆していた折も折、東大教授藤岡信勝氏をリーダーとする「自由主義史観研究会」が、昨年来活発に活動を始めたことは、近來稀

なる快挙で、教科書が教えない歴史は大ベストセラーになりました。果せるかな、早速朝日新聞に叩かれ、次いで左翼学者に糾弾された。しかし当然予想されたことで、敢えて意に介する事ではないと思ひます。自国の歴史を悪玉に貶める東京裁判史観に対して、真っ向から大上段に否定する勇氣は、学者として立派なものと感じします。

ここで最も注目しなければならぬのは、寧ろ左翼歴史家達ではなく、一般の歴史教師達の無関心・無氣力・無責任・創造性の無さ・閉鎖性・無思考のいい加減さ等についてであり、識者の指摘する所であります。それば、現場の教師が告白しているとおおり、教育界の墮落・荒廢そのものに起因していると思われまふ。

自由主義史観研究会の今後の活躍は、着々と成果を上げて行くものと大きく期待を抱くものであります。それは世代交代というか、戦後教育を受けた世代に対する継承の事でありまふ。即ち戦後の復興再建は、明治人間が国家の指導者となり、大正人間が社会の推進力となって、昭和天皇の御稜威と戦没者英靈のご加護により、国家民族の総力を上げて弥栄と泰平をもたらすし、特にアジアに於いては、欧米の植民地が悉く独立して、平和と繁栄を自

負しておりますことは、皆さん御承知のとおりであります。然しながら問題は、戦後五十二年明治人間は消え去り、大正人間は高齢化して余命幾許もない今日、例えば特攻隊戦没者慰霊祭の継承さえ、未だに国家的事業になっていない事を思うとき、将来に対して一抹の不安と心残りを痛感せざるをえません。

私の所属した二百二十一聯隊も、昨年の旭川護国神社での慰霊祭を以って終焉となりました。また白鷗遺族会（海軍飛行予備学生の遺族）も一昨年に最後の合同慰霊祭を行なっておりません。又靖國神社に永代供養をお願いして解散する戦友会も、逐年多く見受けられるようになって来ました。その反面、昭和三十四年から続けられている「殉国沖縄学徒顕彰会」（代表国士館大学教授・金城和彦）は、童顔溢れる中学校の健児たちが、戦列に馳せ参じて、鬼神も泣く壮烈な戦死を遂げた御霊の、慰霊を有志の志で実施していることは称賛されるべきと思います。また、現役学生の主催する「大東亜戦争戦没全学徒慰霊祭」（首都圏学生文化会議五十名）も既に十二回を数えています。その外にも戦後世代による慰霊祭が、逐年全国的に開催される事を期待したい。

次に中学生たちの声を紹介したい。

一、八王子市楠木玲子さん

「日本人は朝鮮・中国そして東南アジアへ行って、とてもひどいことをしたんです。これは第二次世界大戦の授業で教えられた。それでも私は「何故日本人なのに、同じ日本人のことをとても悪く言うのだろう」と言う疑問も感じた。その後私は靖國神社へ行った。お参りの後資料館に入った。その一室に特攻隊の人達の写真と手紙が並べてあった。どの写真もこれから死にますという様な、顔はせず皆笑っています。その時隣にいた女性がその写真の前で泣き始めたのである。私も何か胸が苦しくなった。もう五十年もたつているといふのに、資料館を全部見終えた時、この神社に祭られている兵隊さんに有り難さを感じた。今の日本は、あの時あの戦争で戦って呉れた兵隊さんのお陰で、この世の中が存在しているものと思った。私は未だ中三である。戦争のことは知らない。でもあの時命を捨ててまで日本を救おうとして呉れた兵隊さんに感謝したい。

二、靖國會報の遊就館拝観者の声より
ア、日本大学生（二十二歳）

このような悲劇は二度と繰り返してはならない。ただ平和平和と叫ぶだけではダメである。まず何があったのか、

か、当時の人々がどの様な気持ちで戦ったのかを、日本の国民はもっともっとあの戦争の意味を考えるべきだと思ふ。今のうのうと平和を謳歌して、身勝手な戦争アレルギーを振り回している人々より、にっこり微笑んで散っていった英霊のほうが、百万倍も美しいと言う事だ。自分を振り返って申し訳がないと同時に、日本という国をもっともっと素晴らしく誇りをもてる国になる為に微力ながら力を尽くしたいと思ふ。

イ、大学生（二十二歳）

今政府は、大東亜戦争を侵略戦争だとして、謝罪しようとしています。それは日本が大東亜戦争を自立のための戦争だったとする事で、海外から非難を浴び、外交上不利な立場になることを、避けての行動だと思われまます。しかし、当時日本は国民が一つになって戦わなかったら、きっと今の日本の姿はなかったと思います。戦争であったのだから、当時の日本人が、東南アジア等で残酷な行為を行ったということ、は、仕方のない事なのかもしれませ

あります。韓国などが掲げている事には嘘が。外国に対して謝罪する事は大切かも知れませんが、それならば一体誰が日本の将来のため戦って、亡くなった英

霊たちの志を守っていくのでしょうか。日本人として絶対忘れてならない事が、いとも簡単に忘れられているのだと強く感じました。

侵略だったという事は、今の社会に生きていくから下せる判断である。戦わなければ国の存立しが無くなるという状況でも、同じ冷静な判断を下せる人はどれほどいるだろうか。

二月二十八日の産経新聞は、自民党の当選五回以下の若手議員を中心として、「日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会」の設立総会が、二十七日自民党本部で開かれた、と報じていた。衆参両院の議員六十二人が出席し、座長に自見庄三郎氏を選出した。会員の一人渡辺博道氏は次のように述べている。

「歴史教育で一番問題なのは歴史認識だ。自分の国の歴史を否定するような歴史認識では、どうしようもない。健全な青少年を育成していくには、自分の国なり民族に誇りを持てるようにして行かなければならない。新しい歴史観を作っていく必要がある。」

我々は自民党という保守本流としての、新面目を将来に向けて発揮される事を期待して止まない。

縷々駄文を述べ貴重な紙数を費やして来ましたが、鎮魂は永遠であり、そ

の慰霊は顕彰と共に、国家的行事に迄
発展させるべきであります。

- ・恋にさへ無垢なりしかば事なきを
期すべくもなく戦いに征けり
- ・摩文仁頭つ敵艦ほふるを幻に母は
見しかも子の名を呼べり
- ・まして兵そのほかなしとひれ伏し
て特攻にゆけり朕がみ声に

憂憤歌 七首

国の為命捧げし人々と同じ血汐がか
くも変るか
己が身に替へ守り来しこの国を嘲り
けなす徒輩許さじ
我ら皆愛しき国と思へども憎しき国
といふ輩ある
父祖の代を悪しきといへばいつの日
かやしまの国はうたかたと消ゆ
国うちの昔に物は溢れども心貧しき
うつつ世悲し
散り際に後に続くを信すると遣せし
言葉に何と答えむ
靖國の宮に参るをためらひてなどか
言ひ得ん国のおとどと

愛媛玉ぐし料訴訟

最高裁が違憲判決

田中賢一

戦没者の慰霊顕彰を主眼とする我々
にとつて、真に義憤に堪えないところ
である。それより先に問題なのは、こ
のようなことで訴訟を起すアンチ靖國
の宗教人のいることである。靖國神社
は戦前は國の管理下にあつた。明治天
皇の思召によつてお國の為に命を捧げ
た人をお祀りする為に建てられたこの
神社を、國で護持することに誰も異議
はなかつた。更にまた家の宗教は仏教
であろうとキリスト教であろうと、戦
死したら靖國神社に祀られることに誰
も矛盾を感じなかつた。戦死者の遺族
は靖國の社頭で拍手を打つて拜礼し御
里に在つては坊さんと呼んで法事を行
い、そこに何の違和感もなかつた。現
在の大多數の国民もそうである。

占領下、靖國神社は生き残る為に一
宗教法人となつた。抑々宗教とは一人
の教祖があり、教祖によつて打建てら
れた教義がある。その教義を守る為、
熱心な宗教家は勢ひ排他的となる。と
ころが神社には御祭神はあつても教祖
のようなものはない。御祭神はすべて
我が祖先である。中には先祖が尊崇し
た山などが御神体となつているものも

あるが、教祖というものはない。自然
に成立した習慣はあるが、他の宗教の
ような教義、即ち經典はない。日本人
は昔から神仏を併せ崇敬して、玉串を
奉り、数珠をまさぐり一つも矛盾を感
じなかつた。それが日本人の姿である。
更に靖國神社となると御祭神は我々の
身近な戦死者である。八幡様や天神様
なども異質のものである。それがや
むなく宗教法人となつたので、他の宗
教人の中には己と同類だと思ひ込んだ
輩がいる。これを外道という。

この訴訟は昭和57年に起され違憲合
憲と変転し、今回の最高裁大法廷の判
決となつた。押しつけられた、日本弱
体化の憲法だが、法治國である以上我
々はこれを無視して論ずる訳にはいか
ぬ。憲法第二十条三項には「國及びそ
の機関は宗教教育その他いかなる宗教
的活動もしてはならない」とある。ま
た第八十九条には「公金その他の公の
財産は宗教上の組織若しくは団体の使
用便益若しくは維持のためこれを支出
し又はその利用に供してはならない」
とある。愛媛県知事が昭和56年から6
年間に、靖國神社や皇護國神社に玉串
料等累計16万6千円を公金から支出し
たのは右条項に違反するといふのだ。

憲法というよう基本的な規則は運
用にある程度の幅を持たせているのは

当然である。であるから社会党が自衛
隊違憲から合憲に衣更えてきたのであ
る。もしビタ一文も玉串料を公費から
出してはならぬというなら、宗教団体
が設立している私学に補助金など出せ
ぬ筈である。それよりも大事なことは
裁判官の戦死者に対する心情である。
この判決に対する反対論者の言ひ分
に、そのくらしいの支出は社会的儀礼だ
と新聞に出ているが、儀礼などという
生ぬるいことではない。靖國神社で会
おうと誓つた戦死者の言葉、父に会い
たくば靖國神社に来れと遺言した御祭
神に何と応えるかといふことだ。15人
の判事のうち13人の意見が黒だつた。
お前たちに言い度い、五十年前の日本
人の気持ちはこうだつた。その日本人
の血がお前の体に残っていないのか
と。確かに押しつけ憲法の文面を見れ
ば、そのような結論になるかも知れ
ぬ。それを強制しようとするのは正に
「法匪」といふべきである。

15人の裁判官のうち合憲の意見を出
した三好長官と可部判事の述べている
ことは立派である。特に三好長官は
「戦没者を手厚く未永く追悼するのは
國や公共団体の義務である」と言つて
いる。このお二人は70歳、他の判事は
皆それより若い。よこしまの教を受け
て育ちしか汝を思へば痛む我がむね

特 攻 の 心

評議員 小瀬 利春

(元・回天搭乗員
第二回天隊隊長)

第一次世界大戦のさなか、フランスの首都パリをドイツの新兵器、大型の硬式飛行船「ツエッペリン」が空襲した。迎撃に飛び立ったのは仏空軍の新鋭戦闘機「モラーヌ・ソルウニエ単葉」一機。飛行船を狙って、携行した二発の小型爆弾を次々と投下したが外れた。飛行船は悠々とパリ上空に差しかかり、市街めがけて爆撃を始めた。文明を誇る自国の首都の、自分の住む町の破壊が目の前で始まった。武器を使い果たした戦闘機の操縦士はたまり兼ねてか、急降下してこの飛行船めがけ突入、水素ガスを満たした飛行船は大爆発を起こし、火達磨となって墜落していった。

第二次世界大戦中、昭和十九年一月に比島レイテ湾に侵攻して来た米軍は、周辺確保のあとミンドロ島サンセホ市に大部隊を上陸させた。重巡洋艦「足柄」は軽巡洋艦「大淀」、第二水雷戦隊の駆逐艦六隻と艦隊を組んで月明の一二月二六日夕刻、上陸地点を急

襲した。米軍は数十隻の在泊艦船を退避させた上、航空部隊と魚雷艇群で阻止しようとした。米側の記録によればB二五爆撃機のほかP三八、P四七など各種戦闘機合わせて一〇五機が迎撃に飛び立っている。

戦艦と誤認されて集中攻撃を浴びたが、名艦・足柄は爆撃をすべて回避し、猛烈な対空射撃を続けて殆ど被害を受けることなく、敵の上陸地点に向かって二八ノットの戦闘速度で進撃した。米軍が折角確保した橋頭堡は一転、累卵の危機に曝されたのである。このとき、双発双胴の「P三八単座戦闘機」が一機、「足柄」に向かって機首の四挺の一三ミリ機銃を撃ち続けながら、そのまま左舷に突入した。曳光弾の輝く束が低く足柄の艦腹に向けて伸びていた。

厚い鉄板を突き抜けて、機体が後部兵員室の中に飛び込み、航空燃料と携行弾薬で大火災になった。あと僅か何十センチか上であつたら、そこは酸素魚雷一六本を装填した発射管室だったのである。世界随一の高性能を誇る九三式魚雷は、頭部の炸薬量が三型では八百キロもある。次発装填用を含めて三二本の魚雷が並んでおり、高圧の純粹酸素自体の破壊力もまた大きい。英国王の戴冠式にロンドンまで回航して

参列し、世界中にその名を知られた、歴戦の幸運艦「足柄」も一瞬にして轟沈は免れないところであつた。

足柄は消火作業を続けながら敵泊地に入り込み、照明弾を打ち上げて明るく照らし出された物資集積場に向け、二〇榴主砲一〇門の一斉射撃で、立て続けに大量の砲弾を叩き込んだ。敵魚雷艇も高角砲の水平射撃で撃退した。

充分な成果を挙げて引き揚げる途中、米軍機操縦士の遺体を丁重に水葬にした。足柄も四七名の戦死者を出していた。殆どは、突入した彼が一人で起した大火災のために斃れたのであるが、その壮烈な最後に、同じ軍人として敬意を表したのである。仲間の戦死者と同じく、足柄乗員全員の敬礼を受けて、毛布に包まれた彼の遺骸は南の青い海に沈んでいった。

爆撃で「大淀」が損傷、駆逐艦「清霜」が沈んだが、この「礼号作戦」は戦争末期の数少ない成功を収めた海上戦闘である。

多くの戦史が、被弾した「B二四爆撃機」が墜落して、偶々足柄に当たったとしている。だが、その時の高角砲指揮官ほかの目撃者証言によれば、事実は戦闘機のP三八であり、烈しい対空砲火に被弾していた様子はあるものの、超低空を、全速で飛びながらの、

明らかなたてであった。

たとえ被弾していても、負傷しても、すぐ近くに味方の飛行場があるのならば自分は助かるのに、この米人パイロットは日本の神風特攻機と同じ行動をとったのである。

この二つの例は、味方の危機に遭遇して「これが今の自分が取るべき最善の手段である」と咄嗟に判断して、体当たりを敢行したものと思われる。

人間ならば誰でもこのように、自分の身を捨てても多くの人を救う行動に出るであろう。川に落ちて溺れかかた子供を見た人が、その子の命を救うために、危険を冒してでも飛び込んで助けるのと同じである。それが人の自然なのである。

この重巡洋艦「足柄」に、私は「回天」の搭乗員になるまで乗っていた。一九年の六月、敵がサイパンに米攻したとき、陸奥湾にいた足柄は横須賀に進出、待機したが「あ号作戦」で出動した日本の機動艦隊が敗退したので、むなしく引き返した。

生命線と呼んでいたマリアナ諸島を奪われてしまった。そのあとは、どうなるか？

敵の根拠地が前進して来たと同時に、ここから我が本土まで、遮る防波堤が何もなくなった。このまま日本が

為すところなく艦艇、航空機の消耗を
 続けてゆけば、米軍は日本沿岸の何処
 にも上陸できるのである。

本土が戦場になれば日本民族の大量
 殺戮、国土の破滅となることは目に見
 えている。何とかして敵軍の侵攻を食
 い止める手段はないものか、桶狭間の
 大逆転を打つ新戦法、新兵器はないの
 か。私は日夜焦燥に駆られていた。

一九九年八月、足柄を退艦して、海軍
 の一角に「人間魚雷・回天」が出現
 し、我々がその搭乗員になることを
 知った日、「これだ！ この新兵器で
 日本は救われる」と、仲間とともに喜
 び合ひ、夜の更けるのも知らず語り
 合った。一〇〇本の眼のある魚雷が敵
 泊地に躍り込んで、大艦隊を一挙に覆
 滅する光景を一同は胸に描いていた。
 ようやく日本の将来に光芒を見出すこ
 とが出来て、浮かび上がって来た安堵
 感がこころよかった。

体当たり兵器なら、任務達成の瞬間
 に自分の肉体は粉々に飛散し、生命は
 消滅する。ただ、それで掛けがえのな
 い美しい日本の民族をこの地上に残す
 ことに繋がれば、一身の辛さにはるか
 に勝る価値がある。

仲裁役がない戦争は、どちらかが
 破滅するまで続く。そして、敗戦国の
 悲惨は古今の歴史が示す通りである。

しかも、日本の紙と木で出来た家ばか
 りの、非戦闘員の市街を爆撃し、焼き
 尽くすことは、米国自身が戦前から高
 言し、日本国内でも書き立てられてい
 た。絶対、近づけてはならない相手な
 のである。

本来ならば日本の艦艇、航空機が敵
 艦隊を撃退する筈である。「生還する
 すべのない特攻」は考えることもな
 い。しかし、吾等になお、多くの大艦
 ありと言っても、底に穴があいて、水
 が入って来れば沈む。制空権、制海権
 に支えられてこそ「浮かべる城」な
 のである。現実には、圧倒的となって来
 た戦力の量と質の格差から歯が立た
 ず、敵に近づくことすら出来ない状態
 になって来た。

本土侵攻を防ぎ止める手段は、最早
 や我が身を弾丸に代える特攻しかな
 い。これが当時の日本の若人をめぐる
 客観扶勢であった。

即ち、特攻は一人の日本男児として
 最大の効果を挙げることが出来る配置
 であった。あの戦局のもと「日本男児
 として最大の効果を上げることができ
 る配置であった。あの戦局のもと「日
 本」を護る見地からは、日本人の全体
 から考えて特攻戦術が最も合理的で
 あった。効率は最上である。「一死千
 殺（侵攻軍を）」であり、「一死千生

（日本国民を）」であった。尤も、意
 識としては、目標は敵艦を沈めること
 であり、敵の人間が対象ではない。

ひとことと言えは「自分が死ななけ
 れば、日本人が大量に殺される」こと
 であって、「殺させないために、自分
 が死のう」という状況になっていたの
 である。

「無謀で狂気」と、今ごろ言うのは
 当たらない。事の是非は、その時の状
 況に身を置いて論ずべきである。どう
 してこんな事になったか、などは別の
 次元の問題なのである。

命を捨てて他を救うという点では、
 前記の欧米人の「体当たり攻撃」の例
 は、日本が行った「特攻」と基本的に
 共通する。異なるところは「偶然的の危
 難に遭遇し、その場の判断で身を捨て
 た」のではなく、「自分の国が置かれ
 た現実の情勢を理解して、国と民族を
 護るためには自らの生命を捨てること
 が必要、且つ意義があると判断し、望
 んで還らぬ任務に就いた」点であり、
 その上で「予め命令を受けて、死地に
 向け出発した」ことであろう。

自殺を禁ずる教義から奨励も出来な
 いので、欧米では体当たり攻撃が時に
 あっても多くはない。むしろ、伏せた
 という。だが、日本では七千人近くに
 も及ぶ若人が特攻戦役者として名を残

している。これほどにも数多く「特
 攻」のために若人が集まり、組織的に
 実行した民族、国家は他に類を見ない
 であろう。

特攻を語るとき最も重要なのは、隊
 員たちが「如何なる状況のもとに、自
 分が如何ようにあるべきか判断し、ど
 んな気持ちで死地に赴いたか」という
 点であろう、と私は考える。（これに
 触れない、また正當に伝えないレポ
 ートが多い）

「回天」の場合だけ見ても、特攻隊
 員の経歴、年齢が色々なので、物の考
 え方に人により相違があつて当然であ
 る。動機となつたものは、天皇制、国
 体を護持する純忠、至純至高の愛國
 心、身命を惜しまず戦つ日本武士の敢
 闘精神、戦勢の挽回策、潜水艦の戦力
 回復、危難に立ち向かうのが男の務
 め、親兄弟への情愛から等々。

どの要素に自分が共鳴するか、自分
 自身を納得させる力があるか、人に
 よつて強弱、色合いに差こそあれ、根
 底にあって共通するものは肉親、友人
 など、自らの周囲にある親しみもの、
 愛するものの生命と平和、幸福を護る
 ため、貢献できる場にある自分が献身
 しよう、との思いであつたようであ
 る。

回天の創始者は皇國の急務として熱

誠を以ていくつもの障壁を乗り越え、非常の必死兵器の実現を遂に成し遂げたが、団体護持の一事だけで献身できた人は、回天の搭乗員合わせて一、三七五名のうち、数で見れば少なかつた、と私は思っている。

通常の戦闘で「死ぬかもしれない」と、確実に生命が断たれる出撃特攻隊員とは心理状態が全然違う。特攻隊員たちは、自分の人生がこれっきりになるのであるから、本人の全身全霊を挙げて、本音のところで考える。受けた教育だけで、すんなりと収まるものでもない。それぞれに考え抜いた上で「自分は何の為に死ぬ」という死生観を固めている。固まらないうちに出撃した隊員の心中は無惨である。

特攻隊員となつてから出撃まで、飛行機の場合は纏めるのに、或いは日数が不足した例があつたかも知れないが、訓練期間が長い回天の場合、考える時間は充分にあつた。

自分自身で納得していなければ、一つしかない生命を心静かに捨てられるものではない。生あるものの本能である死への嫌悪感をも抑えて、回天の出撃搭乗員が透徹した気持ちで、潜水艦から発進するときまでの日常を平然と過ごしたと伝えられる。

「それは諦観からではない。人と世

に尽くす使命感、満足感からであつた」と、同じ環境を共に過ごした私どもは理解するのである。

聖書の一節には「人その友のために己の生命を捨つる、これより大いなる愛はなし」との記述がある。(ヨハネ 伝 第一五章)

死にたくて死んだ特攻隊員は一人もいないであろう。特攻は、自分に原因があつてみずから命を絶つ自殺とは異質のものである。自分のために死ぬのではない。心身ともに健全な若人が、ほかの、多くの人々を救うための愛の行動であり、大いなるものへの文字通りの献身であつた。人間の根幹に基づく徳性と言えるであろう。「自分さえよければ」というエゴイストには、特攻は出来ることではない。

戦前、日本人は美しい民族であつた。命を捧げても護らねばならないと思つほどの良い国であつた。値打ちがないものであれば、誰も身を捨ててまて護ろうとはしなかつたであろう。

この国が将来「特攻隊が要るような事態」になることがあってほしくない。だが、気持ちの上では、「誰もが、何としてでも護り抜こうとする」善い社会になつてほしいと願うのである。

基地の花「特攻花」咲き誇る

海上自衛隊鹿屋航空基地

広報作業室

さわやかな5月の風と日射しを受け、鹿屋航空基地内では今を盛りと黄色の「特攻花」が咲き乱れ、基地を訪れる人や隊員たちの目を楽しませている。

人が相次いでいる。毎年「特攻花」の咲く季節になると、報道関係者へ公開し、鹿屋基地の初夏の風物詩のひとつとしてテレビ、新聞等で広く紹介されている。

この花は、草丈6、70センチ花びら八枚の多年草で黄色、直径5センチ前後の花をつけコスモスに似ている。菊に似た香りがし、メキシコ地方に原生する「春草菊」(はるしゃぎく)とも「大金鶏菊」(おおきんけいぎく)とも言われているが、今もって正式な名前にははっきりしていない。第2次大戦中に南方の前線基地から戦闘機の機体や搭乗員の被服に付着してきた種子が繁殖したとも言われている。

大東亜戦争末期の昭和20年3月11日、最初の特別攻撃隊「菊花梓隊」が出撃を行った3月頃に芽を出し、最後の「菊花第3白菊隊」の出撃となった6月に実を結んだことから、誰言うことなく「特攻花」と呼ばれるようになった。

基地内の至る所で初夏の風に揺れな



開花時期 3月中旬〜4月上旬
5月中旬以降

がら楚々として咲くこの花は、死を覚悟した特攻隊員の遺族、生存者から「形見に」と種子や苗を希望する

建国記念日 中央式典祝賀

会場

明治神宮会館

主催

日本の建国を

祝う会

約二二〇〇名の参加者で席は埋まり、檀原神宮遙拝、国歌斉唱に始まり、広島県江田島町教育委員長岡村清三氏の「若者達はなぜ銃を執ったか」と題し、特攻隊員の遺書を引用し、聴衆の肺腑に響く講話があった。ついて映画上映、決議文の採択となったが、文中にいう……今日共産主義革命の直接的脅威は消え去ったものの、我が国の歴史、文化、伝統を否定する風潮は益々深刻化し、今や国民のより所である国家や家族という共同体の存立そのものが、重大な危機にさらされている。昨年未我が国では、自虐的反日史観に貫かれた歴史教科書問題、夫婦別姓の導入を図る民法改正問題、竹島、尖閣諸島を巡る領土問題などが相次いだ。これらは、自国の誇りある歴史を冒瀆し、家族の絆を怪んずる傾向をもたらし、さらには国家主権を自ら否定するものである。

国民が自らの歴史、伝統を否定すれば亡国に至るのは世界の歴史に明らかである。かかる日本の現状を糾すため、今こそ我々は神武創業の高貴なる歴史に思いをいたし、我が民族が信じてきた国の理想の姿を高らかに言揚すべきである。

明治の御代の紀元節の制定は、歴史の原点に立ち戻って国づくりを行わんとする理想を闡明したものであり、明治の先達はあらゆる困難を克服して近代国家建設の大業をなした。今祖国日本の再生のため我々国民はこそこの先人の精神を継承していくべきである。……

このあと紀元節の歌を斉唱したが、参列の若い人も配布した歌詞を見て唱うことが出来た。

最後は聖寿万歳で二時間近い式典を終了した。

八紘を宇とせむとの大理想失せて久しき今日紀元節
子等が皆「雲にそびゆる高千穂」と歌ひし国よ今は何処ぞ

紀元節の歌合唱

映画上映

天翔る青春

主な内容

◎世界の大戦で戦没した若者の手紙をもとに、祖国に殉じた各国の若者の思いを紹介
◎人間魚雷「回天」や神風特攻隊で体当たり攻撃に出撃した若者たちの心情は「鹿児島県の特攻基地の取材及び残された数々の遺書、戦友や遺族たちの思い出とともに再現する

◎玉砕の島、南太平洋のベリリュー島へ海外ロケを敢行。ここで明らかにされた、現地パラオの人々や元アメリカ兵が日本兵士に捧げる鎮魂の心を紹介

この映画は、日本を守る国民会議の企画によるもので、ビデオは五〇〇〇円で頒布している。所要時間は38分、特攻隊員の遺書や出撃の場面などが写し出されており、感銘深いものである。

取扱者「日本を守る国民会議」

〒153目黒区青葉台3-10-1-101

電話03(三四七六)五六一〇



平成八年度回天烈士並びに

回天搭載戦没潜水艦乗員の追悼式

日時：平成8年11月10日 一三三〇／一五〇〇
場所：徳山市大津島 回天記念館 回天碑前

小 灘 利 春

柔らかな秋の陽射しのもと11月10日、大戦中戦没した回天搭乗員一〇六名ほか隊員、並びに回天を搭載し戦場に赴いて還らなかつた潜水艦八隻の乗員八一〇名を追悼する式典が、徳山市大津島に於いて例年とおりの厳粛に執り行われた。

御遺族多数と、県市ほか各種自治体、団体会社の代表、地元有志、海上自衛隊、陸上自衛隊、航空自衛隊など約四百人が徳山から片道四〇分のフェリーで海を渡って、大津島の丘に徳山湾を背景にして立つ回天碑の前に参集した。戦没者御遺族のなかに、世代の交代も伴って新規に参加される方が増えていたことは嬉しい現象であった。有志の若い人々が演奏する、恒例となった「大徳山太鼓・回天」の勇壮且つ清冽な太鼓の響きが島にこだました。かの急迫した戦局にあって、国を思い、民族を思い、愛する人々を護る

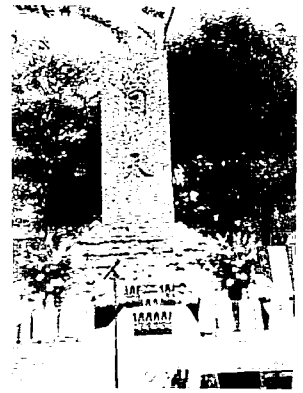
ため、進んで吾が生命を捧げた大いなる愛の若人たちの姿が、面影が次々とまぶたに浮かんで来る。この場所にふさわしい、実に素晴らしい演奏であった。周防灘に面した旧魚雷発射場を保存する昨年来の工事は既に完成していた。全体が綺麗になり足場も良くなったので、途中の長いトンネルが照明など整備されたのと相俟って、歩きやすくなっている。

発射場の前に広がる海面は、かの戦中、回天の搭乗員たちが狭水道通過訓練や洋上航行艦の襲撃訓練を毎日行っていた水域である。また、沖繩への特攻出撃を待つ戦艦大和、巡洋艦矢矧と駆逐艦部隊が20年4月上旬に勢揃いした海面でもあった。回天を操縦して通過する搭乗員はコースを心待ち大和に近寄せ、かの巨大な戦艦を潜望鏡を通して眺めたものである。瀬戸内の穏やかな風光ながら回天隊員たちにとっ

ては鮮烈な印象が今なお残る眺めなのである。大津島を訪れて、この発射場跡を現実に踏む人々は、海上遙に豊後水道を望めば、回天を搭載した潜水艦が南溟を目指して出撃してゆく光景が幻となって浮かんで来ることであろう。

回天隊発祥の地、大津島の東の山口県光市に当時第二特攻戦隊の本部があり、回天搭乗員も最も多くいた訓練基地であった。その光基地の跡に戦後五年を経た本年、光から出撃した回天と潜水艦の戦没隊員、乗員を慰霊する立派な「回天の碑」が地元有志の御努力により建立され、10月10日に盛大な除幕式が行われた。これで瀬戸内海西部の四カ所にあった回天の訓練基地の全てに慰霊碑が揃ったことになる。

戦没特攻戦士たちに御厚意を寄せられる多くの人々とともに、御魂の平安を心から祈念する次第である。



平成 8 年度事業報告

平成 8 年度事業計画に基づき以下のとおり事業を行った。

I. 慰霊事業

(1) 陸海軍特攻隊戦没者追悼集会

平成 8 年 4 月 2 日、靖国神社において陸海軍特攻隊戦没者合同慰霊祭を執り行った。
参加者は政財界要人来賓 48 名、遺族 64 名、会員 284 名併せて 396 名であった。
慰霊祭終了後、私学会館において当協会年次総会を開催した。

(2) 世田谷山観音寺・特攻平和観音年次法要

平成 8 年 9 月 23 日、世田谷山観音寺において同寺が主催する第 45 回年次法要を協賛した。
当日は来賓 44 名、遺族 60 名、会員 318 名、その他 30 名併せて 452 名の参加があった。

(3) 全国各地慰霊事業への協賛

- | | | |
|---------------|----------------------|----------|
| 1. 鹿屋慰霊祭 | 4 月 5 日 (最上理事長参加) | 鹿児島・鹿屋市 |
| 2. 都城慰霊祭 | 4 月 6 日 (同上) | 宮崎・都城市 |
| 3. 荒鷲の碑慰霊祭 | 4 月 13 日 (同上) | 埼玉・熊谷市 |
| 4. 万世特攻慰霊祭 | 4 月 14 日 (同上) | 鹿児島・加世田市 |
| 5. 殉国七士の碑慰霊祭 | 4 月 29 日 (同上) | 愛知・三ヶ根山 |
| 6. 知覧特攻慰霊祭 | 5 月 3 日 (同上) | 鹿児島・知覧町 |
| 7. 護国英霊祭 | 7 月 5 日 (同上) | 兵庫・宝塚市 |
| 8. 原町慰霊祭 | 9 月 20 日 (同上) | 福島・原町市 |
| 9. 水戸つばさの塔慰霊祭 | 10 月 20 日 (同上) | 茨城・水戸市 |
| 10. 明野慰霊祭 | 10 月 25 日 (同上) | 三重・小俣町 |
| 11. 浜松碑前祭 | 10 月 28 日 (同上) | 静岡・浜松市 |
| 12. 伊良湖岬慰霊祭 | 11 月 3 日 (同上) | 愛知・伊良湖岬 |
| 13. 回天慰霊祭 | 11 月 7 日 (小瀬評議員参加) | 山口・徳山市 |
| 14. 海原会慰霊祭 | 11 月 10 日 (木村事務局長参加) | 茨城・土浦市 |

II. 慰霊碑建立事業

建立について予定地を物色したが決定をみず、継続課題となった。

III. その他の事業

(1) 機関紙「特攻」の発行

26号, 27号, 28号, 29号を発行し会員他へ配布した。

(2) 「特別攻撃隊」の販布

販布 99冊
在庫 340冊

(3) その他

1. 特攻隊に関する外国文献の集取を行ない、購入した。
2. 遺族、会員その他からの情報により名簿の整備を行ない会員相互の情報交換に資した。
3. 陸士 54 期生会、同 57 期生会の協力により 237 名の入会があった。

以上

貸借対照表
平成8年12月31日現在
(第4年度)

Table with columns: 科目 (Item), 金額 (Amount), 単位 (Unit). Rows include 資産の部 (Assets), 負債の部 (Liabilities), and 純資産の部 (Equity).

収支計算書

平成8年1月1日から平成8年12月31日まで
(第4年度)

Table with columns: 科目 (Item), 予算額 (Budget), 決算額 (Actual), 差異 (Difference), 備考 (Remarks). Rows include 収入の部 (Income) and 支出の部 (Expenses).

- 注1 新規会員及び2年以上の会員登録者が多かったため。
注2 経済不況の影響で法人企業からの大口寄付が少なかったため。
注3 予算費15万円は、酒礼品雑費に充当した。
注4 慰霊碑落成として1千万円計上したが、設備場所等の関係で実現できなかったため。
注5 寄付金が予算額を大幅に下回ったため。

編集担当者よりお知らせとお願い

いつも手持原稿は二回発行するほど確保しておりますが、陸軍航空と空挺のものが多く海軍関係が少く苦慮しています。また水上特攻及び水中特攻のものが余りありませんので、それらの関係者は資料だけでも結構ですでお寄せ下さい。

各グループで慰霊祭を举行されたときは必ず記事を出して下さい。それは祭典の模様だけでなく、戦史的なことにまで筆を及ぼしてもらい度いものです。たとえ断片的なことでも、慰霊祭場に臨めば思い当ることがあると思います。

●後に続くものを信じて行かれた特攻烈士に

貸借対照表
平成8年12月31日現在
(単位:円)

Table with columns: 科目 (Item), 金額 (Amount), 単位 (Unit). Rows include 資産の部 (Assets), 負債の部 (Liabilities), and 純資産の部 (Equity).

慰霊碑建設費慰霊平和新会協会の平成8年度の計算書について監査した結果、適正であることを認めます。

平成9年2月25日

理事 岡 西 輝 彦
理事 小 坂 利 光

対し、今の日本国の現状はまことに申訳ないことです。平身低頭の外交姿勢、教科書問題、靖国神社のことなど、どれ一つとして英霊の御心に背くものばかりです。これらのことを弾劾し世論の矯正に努めることは、慰霊の最たるものと信じます。そのような記事もどしどしお寄せ下さい。

●我々年寄りだけが集って、慰霊祭と称し祭文を奉ることも結構ですが、それが生き残った者の贖罪にも似た気持を充たすことであっては、慰霊どころか己が心を慰めることとなります。最大の慰霊は顕彰にあると思います。戦没特攻隊員の精神を世に顕揚し、それをもって自虐的・反日的な徒輩を打破る、そのような投稿文を期待致します。